

# 『ファウスト』脚注の試み（3）

## DER TRAGÖDIE ERSTER TEIL

### 悲劇第一部

## NACHT

夜 (Vers 354—807)

渡辺信生

Faustの独白と共に、ゲーテが知っていた Puppenspiel がすでに始まっている。この独白は、16世紀の一人の学者を描いている Marlowe (1564—93) に遡る。この学者は四つの学部すべてに満足できずに、当時 Magie と呼ばれていたものに没頭する。ゲーテは若い頃、しばしば限界に突き当たっていた自らの認識の憧れを、この素材で表現することができた。ゲーテはその限界が、自分自身の限界であるばかりでなく、16世紀以来の近代科学の限界でもあることを認識していた。彼は学生時代に、16、17、18世紀の知識に飢えた努力を、2、3の典型的な例によって学んでいたのである。„Dichtung und Wahrheit“ (2. Teil, 8 Buch) に於て、ゲーテはそのことを比較的詳細に述べている。„Faust“ はゲーテにとっては、16世紀の素材によるドラマなのである。„Götz“ が16世紀の Rittertum や Fürsten を描き、„Egmont“ が都市生活と、スペイン人との戦いを描いているように、„Faust“ は16世紀に於ける詳細に亙る学生生活のドラマなのであって、古い習慣もかなり18世紀まで保存されていたのである。„Nacht“ の場には、このような種類の特徴が多く含まれているが、18世紀の内面性の言語とも結びついている。Faustの内面の不安に応じて詩行も変化する。即ち、うんざりした気分が、V. 354—85の Knitterversen<sup>1</sup>で語られる。憧れが、V. 386—429の強弱が規則的に交替する Viertakter で、認識への集中が、V. 430—67の Madrigalverse で語られる。それからこの Madrigalverse は、V. 468—79の自由韻律になる。(Trunz). <sup>1</sup>Knitterversen: 4 hebig で Senkung は自由。従って8音節や9音節を越えることもよくある。対韻 (Paarreim) が支配的。(Ciupke).

この場の V. 354—597とV. 602—05とは、すでに „Urfaust“ (1775年) に含

まれている。これらの詩行はドラマの最も古い部分に属していて、最後の Frankfurt 時代に由来する。F. J. Schneider は、これらの詩行はすでもっと早く、1773年の夏と秋に、„Satyros" 及び „Prometheus" 断片と一緒にできたということは、ありそうなこととしていた。Senkung を自由な形で填めている Knittelverse (V. 354-85) による、大学の活動への批判の部分は、確かにもっと古いもので (H. Fischer-Lamberg の研究によれば) Faust-Wagner, Mephisto-Schüler, Erdgeist の場の詩行と共に、1772-73年の冬にできた。Knittelverse (V. 386-429) による独白の継続部分は、殆んど一貫して一音節で満たされた Senkung を持っている。大宇宙の符と地霊の符を見た Faust は、Madrigalverse (V. 430-67) で語る。地霊が近づくと、それは自由韻律 (V. 468-79) にゆるんでゆき、それから次第にまた Reim に向かい、Madrigal 調の地霊への敬意の表明 (V. 480f.) へと高まって行く。地霊との出会い (V. 489-513) は、引き裂かれた Knittelverse のドラマチックな言葉の報酬で始まる。そして地霊の嘲笑する四つの問 (Madrigalverse) へと移って行く。それに対して Faust は挑戦的に Knittelverse で反問し、返答する (V. 499f.)。地霊の魅力的な自己表現が、Senkung の自由な Zweiheber (V. 501-07) で続く。そして Daktylus<sup>1</sup> の Vierheber (V. 508f.) で頂点に達する。Faust は自分の憧れと努力が、地霊の出現でうまく成就したとを感じるが、次いで致命的な拒否に会い、崩折れる地霊の場のドラマチックな頂点 (V. 510-13) は、同時に言語上の造形術の頂点になっている。即ち、Faust の Knittelverse (V. 510f.) は、Stabreim (頭韻)、Binnenreim (行内韻)、Assonanz (母音押韻) の点でも、音声と音色の点でも、地霊のイメージを天才的に想起させるものである。その際、地霊の言葉の3拍より成る拍子に比べて、よりダイナミックな効果のある交替するリズムを持つ、Faust の詩行の著しい高揚した抑揚は、際だった特徴を示している。地霊の最後の言葉 (V. 512f.) の破壊的な効果は、簡潔な格言のような形式によって高められている。同様の簡潔な形式で、同時に Faust の韻律、声の響き、カデンツが、脚韻によって受け止められ、極めて意味深い短縮の形で凌駕され、従って完璧にけりがつけられている。地霊が消えるときに、崩折れる Faust が口ごもりながら反省する際の (V. 514-17) 自由韻律は、表現と機能に於て、地霊が近づくときの自由韻律とは、正反対になっている。それに続く V. 606 以降は、1798年以後にできた。それらは韻律に於ても、古典期のより節度のある様式への意志を示している。(Reclam).

<sup>1</sup>Daktylus: 3音節から成る詩脚: -∨∨ (Ciupke). 韻律については異なる見

解もある。例えば V. 386—429 について、Ciupke は 4 hebig の jambisch (最初は対韻、次いで大抵は交差韻) としている。

453 行に及ぶ極めて長大なこの場は、大体に於て専ら独白形式である。以下のように区分されるが、表現、方向、気分に於けるこのような変化によって、この場は単調さから守られている (Arens) :

1. Auftritt

- |  |         |
|--|---------|
| 1. Monolog (Selbstdarstellung)                   | 354—385 |
| 2. gerichteter Monolog (an die Umgebung)         | 386—429 |
| 3. gerichteter Monolog (Zeichen des Makrokosmos) | 430—459 |
| 4. gerichteter Monolog (Zeichen des Erdgeists)   | 460—481 |

2. Auftritt

Faust—Erdgeist 482—513

3. Auftritt

Faust (Übergangsmonolog) 514—521

4. Auftritt

Faust—Wagner 522—601

5. Auftritt

- |   |         |
|---|---------|
| 1. Faust (Reflexionsmonolog)                  | 602—689 |
| 2. gerichteter Monolog (an Phiole und Schale) | 690—736 |
| 3. gerichteter Monolog (an den Chor)          | 737—807 |

ト書 Nacht——暗闇の時間として、光と秩序の世界に対立する。(Gaier). 舞台の指示は、hochgewölbten, engen gotischen Zimmer となっている。このドラマの他の場と同様に、この光景は、リアリスチックな特徴ばかりでなく、象徴的な特長、即ち、上方への方向と同時に狭さも持っている。ゲテはスケッチ風の素描で、一度自分の部屋にいる Faust を描いている。室内はゴシック風の円天井で比較的細長い。恐らくこの素描は、Weimar で „Faust“ の上演を考えた時期 (1810年11月) のものであろう。(Trunz)。

hochgewölbt —— gotisch-spätmittelalterlich の意。(Gaier). gotisch —— zum ausdrück der geringschätzung und verachtung. „mittelalterlich“ im sinne von „längst überwunden, höchst veraltet, zurückgeblieben, ausgesprochen unmodern“. (Grimm). 18世紀の古典主義者にとっては、barbarisch, verschnörkelt, unübersichtlich の意。(Gaier).

Faust (sitzt) unruhig. Pult — ein gestell mit einer schrägen fläche, um daran stehend oder sitzend zu arbeiten, zu schreiben, zu lesen. (Grimm).

354—56. Habe — (Ich) habe. (Thomas). 3行下の studiert とで現在完了。nun — die zeitliche beziehung geht auf eine handlung, einen zustand der gegenwart als folge der vergangenheit. (Grimm). 例えば bisher, bislang が適当か。ゲーテの時代によく自然科学の学部によって拡充された、ルネッサンスの大学の4学部は、この順序ですでに Marlowe によって名をあげられている。(Gaier).

中世や近代初期の大学では、学生は先ず哲学部で Grammatik, Rhetorik, Dialektik や 2・3の課目を学んだ。それからより高度の、より名声のある3学部の一つに進んだ。大学の教師にとっても、学部を変えることは、全く普通のことであった(19世紀までは一般に、哲学部の教授の給料は僅かで、法律家と医者の方はかなり高く、神学者が一番高かった)。(Schöne). Juristerei — Jurisprudenz の軽蔑的表現。(Thomas)。

leider auch Theologie — 神学は実際最も直接に、解決不能の問題に導く。神学は Faust の時代には(ゲーテの時代にも)、机上の学問に硬直していた。Faust は神学を拒否するけれども、魔術師としても依然として Gottsucher である。vgl. V. 415, 434. (Reclam). Faust の冒頭の独白は、以下の物語すべての前提になっている。どんな大学の知識も、Faust には無意味に思われる(vgl. V. 1066f.: „Was man nicht weiß das eben brauchte man, / Und was man weiß kann man nicht brauchen“). „leider auch Theologie“ という発言の前では、根本的なキリスト教の教義に対する Faust ののちの否定(V. 1605f., 1667ff., 11442ff.)は、意図的に行われた離反を激しいものにする。信仰を失った、深い懐疑的な「近代の自我」が舞台に登場する。(Schöne)。

このドラマは Knittelvers で始まる：

Hábe nun, ách! Philosophie,

Júristerei und Médizin,

Und léider áuch Théologie (Trunz).

357. Durchaus—ゲーテの好んだ言葉。(Grimm). durch und durch, bis zum Ende. (Arens). ゲーテが特に好んで用いたこの „Bemühen“ は、V. 11936: „Wer immer strebend sich bemüht“. の決定的な個所に戻って行く。(Buchwald). Faust が神学の研究で不満を述べていることは、„odium

theologie" (Haß der Theologie), 即ち、果てしない、粗探し的な、実りなき教義上の論争である。(Lange).

Bemühn —— Medizin と韻を踏む。ゲーテの押韻の習慣に於ては、同じタイプの円唇音の母音と、非円唇音の母音には相違がない。母音 ü と i は、「高前母音」と呼ばれるタイプに属していて、相互に韻を踏むことがある。例えば、Zügen : liegen (V. 440f.). 母音 ö と e は、「中前母音」で相互に韻を踏むことがある。例えば、Bergeshöh'n : gchen (V. 392f.), näher : höher (V. 461f.). 複母音 ei と eu も韻を踏むことがある。例えば、Zweifel : Teufel (V. 368f.). (Heffner). この行の韻律は：

Durchaus studiert, mit heißem Bemühn. (山口).

358. Da —— hier. nun —— jetzt. 韻律は : Da stéh' ich nùn, ich ärmer Tór, (山口).
359. als wie —— wie. ここは =um keinen Schritt weitergekommen in Richtung auf sein Ziel. (Arens). 冒頭で直ちに話題になるのは、広く行われている「諸学問」、及びそこから生ずる知識や、通常の研究の軽視である。ゲーテは晩年に次のように判断を下している。Maximen und Reflexionen Nr.147 : „In den Wissenschaften ist es höchst verdienstlich, das unzulängliche Wahre, was die Alten schon besessen, aufzusuchen und weiter zu führen." Nr. 154 : „Wenn verständige, sinnige Personen im Alter die Wissenschaft gering schätzen, so kommt es nur daher, daß sie von ihr und sich zuviel gefordert haben". (Arens). 韻律は : Und bin so klüg als wie zuvor! (山口).
360. Heiße —— (Ich) heiße. gar —— sogar. (Fischer). 中世の大学に於ける学位の順位は、Baccalaureus (V. 6689ff.) に始まり、Lizenziat, Magister, Doktor に至る。哲学部の教師に対しては、19世紀に至るまではまだ Magister の肩書が用いられていた。Doktor の方は最初は、より程度の高い 3 学部から授与された。(Schöne). Urfaust では „Heisse Doktor und Professor gar".
- 361—63. ziehe ... herum —— herum|ziehen = im Kreise hin und her ziehen. (Fischer). an —— gegen, annähernd bei Zahlenangaben mit Akk. (GWb). zehen —— mhd. zēhen > zēn. = zehn. ゲーテは若い頃よくこの形を用いた。(Thomas). Jahr' —— Jahre. Apostroph のついていない版の方が多い。ゲーテは Jahre と同様、Jahr を Pl. としてよく用いた。(Heffner). vgl. V. 1776, 2361, 2627, 3997, 4228. krumm —— von gerader Richtung abweichend.

(Fischer).

Schüler — in älteren Sprache auch = Student. (Fischer). aus lat. scholaris. die bezeichnung umfasst in älterer sprache allgemein auch den, der eine hohe schule besucht, den studenten. (Grimm). vgl. V. 445, 1934 ... an der Nase herum — einen bei oder an der nase herumführen, herumziehen — ihn nach belieben führen, ihn zum besten halten, ihn mit leerer hoffnung teuschen. (Grimm).

Faust はようやく10年ほど教えている。しかし „Hexenküche“ では30年若返っている。そこから Luden は、Faust は冒頭では54歳に違いないと結論した。他方 Faust が24歳で Doktor の学位を得たと仮定するなら、Faust には34歳しか認められないだろう——これは4領域全部の徹底した研究に、更なる20年を Faust に認める場合にのみ、解決される矛盾である。

(Arens). V. 360f. の韻律は：

Heiße Magister, heiße Doktor gar,

Und zieh schon an die zehñ jäh' (Ciupke).

364. sehe — (ich) sehe. sehen — einsehen. wissen — gewisz sein, überzeugt sein. (Grimm). wissen にアクセントを置く。(Witkowski). ここは二重に誇張した、過激な、逆説的な懐疑の表現である。„nichts“ は „nichts Rechtes“, od. „nichts bis auf den Grund“ を誇張したもの。„wissen können“ は、„was die Welt/Im Innersten zusammenhält“ (V. 383) を認識している超人間的な知性は知っている、ということを強調したもの。この表現は矛盾している。なぜならこの表現が正しいのなら、Faust 或いは人間は、何一つ知ることにはできないということを、Faust が悟ることはあり得ないからである。... 最高の真理と最高の善の所有者の意味で、神になるという Faust の最初の努力と共に、現代のアダムのドラマがここで始まる。(Gaier).

365. Das — 前行の daß 以下を受ける。mir das Herz — mein Herz. schier — beinahe, geradezu. (Fischer). verbrennen — transitiv, durch feuer gänzlich vernichten. (Grimm). will — z. B. Es will regnen. 雨が降りそうだ。V. 362—65の韻律は：

Heräuf, heráb und quèr und krümm

Meine Schúler àn der Náse herùm—

Und séhe, daß wir nichts wissen können!

- Das will mir schier das Hèrz verbrénnen. (山口).
366. alle die Laffen — alle Laffen. 次行で列挙する同僚たちを軽蔑して言った言葉。(Schröer). der Laffe — ein zugleich alberner und eingebildeter Mensch. (Fischer). この行の韻律は：  
Zwar bin ich geschéiter als álle die Láffen. (Heffner).
367. Doktoren, Magister, Schreiber und Pfaffen — 冒頭の所で4学部が列挙されているので、ここも Doktoren は Mediziner, Schreiber は Rechtsgelehrter と理解される。Magister と Pfaffen は世俗的な呼び方。(Trend.). 15世紀以来哲学部の教師は Magister と呼ばれた。(Grimm). Schreiber — wer berufsmäßig für Andere schreibt, auch als Beamter bei öffentlichen Behörden. (Heyse). 英訳では : officials, jurists, scribes, clerk など。Pfaffen — der geistliche überhaupt ; der heutige verächtliche nebensinn scheint erst um die zeit der reformation zu sein. (Grimm). Faust は最も軽蔑している Pfaffen で終るために、程度を順に下げている。(Düntzer). 恐らく4学部の代表者が言われているのではなく、むしろこの列挙は、知性と学識に従った段階のように思われる。(Arens).
368. Skrupel — lat. scrupuls ; das spitze Steinchen. das stechende, ängstliche Gefühl, die Ängstlichkeit, Besorgnis, Bedenklichkeit. (Georges). keine Skrupel = keine Gewissensbisse. (Schröer).
369. Fürchte — (Ich) fürchte. sich vor et<sup>3</sup>. fürchten. 学問研究の成果が、教会の教義と一致しない場合、教会から地獄行きの罰で脅かされるスコラ派の学者たちとは違って、Faust は教条主義に強制されることなく、自由に学問上の研究を行っている。Skrupel と Zweifel は、教会の処罰を恐れずに、Faust が自らの研究から、教義とは一致しない、最終的な結論を引き出す妨げにはならない。(Trend.). Teufel — Faust は悪魔の存在を否定はしないが、究極の秘密の探究を妨げるような恐怖も持たない。(Reclam).
370. Dafür — as an offset to that. その埋め合わせに、その代償に。vgl. V. 2988. (Thomas). alle Freud' — Sg. jm. et<sup>4</sup>. entreißen.
371. Bilde — (Ich) bilde. 次行の Bilde も同じ。sich<sup>3</sup> et<sup>4</sup>. einbilden — うぬぼれる。was Rechts — etwas Rechtes = etwas ordentliches, richtiges. (Grimm). etwas Tüchtiges, Gehöriges, Bedeutendes. (SWb). vgl. V. 1879, 4125. (Thomas).
372. könnte — 接続法Ⅱ. 結果的に非現実になるため。was — etwas.

373. Die Menschen zu — (Um) die Menschen zu. jdn bekehren — jdn zum guten, richtigen Handeln, zur sittl Läuterung führen. (GWb). 真に知るに値するものは、何一つ知らないの、Faustは真に教えるに値するもの、即ち、人間を bessern したり、bekehren したりする力のあるものは、何一つ教えることはできない。(Arens).
- 374f. この Faust の言葉は、「Vor dem Tor」の場 (V. 993—1021) と矛盾している。それはこの „Nacht” の場は、「Faust」の一番古い部分に属するけれども、「Vor dem Tor」は1808年の „Faust” I. 出版のために初めて書かれた、ということから説明される。(Trend.). „Herrlichkeit der Welt” によって、悪魔はイエスを誘惑した (マタイ4, 8. →V. 10131). Faustの欲求は従って、徹底して物質的なもの、感覚的なものに向けられる。(Schöne). Mattäi 4, 8f.: „Wiederum führte ihn (Jesus) der Teufel mit sich auf einen sehr hohen Berg, und zeigte ihm alle Reiche der Welt und ihre Herrlichkeit; Und sprach zu ihm: Dis alles will ich dir geben, so du niederfällst, und mich anbetest.”
376. Es — 形式上の主語。kein Hund が真の主語。möchte — 古い意味の könnte. (Witkowski). 接続法Ⅱ. 非現実の假定。so — in der Weise. (Fischer). Faustには信仰も知識も、同じように疑わしいものになってしまったので、肯定的よりも遥かに否定的な性質のものである、Faustの完全な精神的自由から、喜びが生ずることはあり得ない。それに富や輝かしい地位から生ずる喜びも (従って Faustには重要でなくはない)、Faustには与えられていないので、この破滅的な結末に至るのである。(Arens).
377. Drum — Darum. sich et<sup>3</sup>. ergeben — 没頭する。現在完了。Magie — Faustがこの Magie という言葉で何を考えているかは、次の2行で一層明らかになる。Faustは霊たちと関わって、彼らによって認識を得たいのである。この認識への願望は、世界の関連 (V. 382—84) と関わっていて、それ自体は悪いことではない。Faustは „der lebendigen Natur, da Gott die Menschen schuf hinein” (V. 414f.) について語っている。Faustは認識を望む。そして学問がこの認識を与えることができないので、Magieによってこの認識を手に入れようとする。それから地霊が彼をはねつける。そのあと Mephisto が Faust の仲間になって、色々なことを彼のためにする。しかし „was die Welt im innersten zusammenhält”. (V. 382f.) を、Faustに説明することは決してない。Mephisto の Magie は、この最初の独白で



Faust が考えているような Magic ではない。

Magie には地霊と Mephisto, 即ち、自然の霊と悪魔によって表わされる二つの側面がある。Faust が最初に考えている認識を求める Magic から、V. 1271ff. で利用することになる „Salomonis Schlüssel" (V. 1258) のような Zauberbücher を経て、それから Mephisto の Magic に辿りつくということは、いかにも Faust らしい。結末の „Könnst' ich Magic von meinem Pfad entfernen" (V. 11404) という文で、Faust が考えているのは、特にこの Mephisto の Magic である。Magic に対する Faust の関わりは、最初から Faust—Stoff に付随している。16世紀からゲーテの時代までの Magic についての文献は、この概念の二面性を常に示している。一般に „weiße" Magic と、„schwarze" Magic の区別があった。前者は自然の認識のみを求め、後者は享楽、権力などを求める。前者は自然の霊と、後者は悪魔の霊と常に結びつく。(Trunz).

Ulm の Puppenspiel では、Faust は次のように言う : „Alls zu sehen und mit Händen zu greifen möchte ich wünschen, deswegen habe ich mich entschlossen, das studium theologicum (Studium der Theologie) auf die Seite zu setzen und mich an dem studio magico (Studium der Magic) zu ergötzen." (Alt).

378. Ob mir ... — 前に Um zu sehen を補う。(Heffner). durch Geistes Kraft und Mund — Hendiadys (二詞一意). = durch den kräftigen Mund eines Geistes. (Thomas). vgl. V. 9801 : „Ist auch Geistes Mut und Kraft". (Schmidt). Mund — Offenbarung. (Fischer). Aussprache, Zuspruch. (Schmidt).
379. manch — manch(es). mir ... würde kund — mir ... kund würde. 私に告げられる。würde — 接続法 II. 非現実の假定。Urfaust では werde.
380. Daß — Damit. 2行下の Daß も同じ。(GWb). mit sauerm Schweiß — Nach dem apokryphen Buch Sirach, Kap. 14, V. 15 : „Du mußt doch deinen sauren Schweiß andern lassen, und deine Arbeit den Erben übergeben". (Erler). sauer — vom Schweiß, der bei beschwerlicher Arbeit vergossen wird. (Fischer). saurer Schweiß — schwere Anstrengung. (Fischer).
- 382f. erkennen — anschauendes (intuitives) Erkennen des Weltzusammenhangs im Gegensatz zum begrifflichen Zergliedern von Einzelerkenntnissen. (Reclam). vgl. Goethes Gedicht an Merck 1774 : „Erkenne jedes Dings

Gestalt/Sein Leid und Freud Ruh und Gewalt/Und fühle wie die ganze Welt/Der große Himmel zusammen hält." (Schmidt). V. 382-85では、Erkennen — Schauen — Tunが、Magieを始めることになる尻上りの順序になっている。(Gaier).

384. Schau' alle Wirkungskraft und Samen — Daß (=damit) ich alle Wirkenskraft und Samen schau. Wirkenskraft — wirkungskraftの別形。kraft des hervorbringens. (Grimm). die lebendigen wirkenden Kräfte der Dinge. (Witkowski). Samen — 錬金術の用語に従えば Urstoffe. (Düntzer). vgl. Agrippa, De occulta philosophia (Über die okkulte Philosophie): „Aller Elemente Basis und Grundlage ist die Erde; denn sie ist Object, Subject und Behälter aller himmlischen Strahlen und Einflüsse; sie enthält in sich die Samen und Samenkräfte aller Dinge." (Gaier).

V. 382f. との関連からすると、この詩行の意味は = schau selbst die alles durchwirkende Kraft und die durch sie geschaffenen Elemente. Faustの不遜な目的は、宇宙を支え、動かし、全体の調和を惹き起すものを、認識しながら眺めること、眺めながら認識することである。つまり Faustは、大天使さえも分からないものを、理解したいのである。(Arens).

385. Und tu' nicht mehr ... kramen — Und daß (=damit) ich nicht mehr ... kramen tue. in Worten kramen — sich<sup>3</sup> mit leeren Begriffen zu schaffen machen. (Fischer). über Dinge, die man selbst nicht begreift, hohle Worte machen. (Trend.). tunはここでは助動詞で、翻訳しないのがベストである。(Heffner).

- 386f. O sähst du ... auf meine Pein — O wenn du doch ... auf meine Pein sähst! sähst — 接続法Ⅱ。非現実の願望。お前が私の苦しみを見るのも、これが最後ならよいのだが。Mondenschein — an die bedeutung des scheinenden Mondes selbst rührend. (Grimm). Mondschein, Mondesscheinが普通。Mondが弱変化して複合名詞を作るのは古い形。(Thomas)。この2行の意味は = O nähme doch dieser peinvolle Zustand ein Ende!つまり自殺への憧れの表現と見るのは誤りである。(Arens)。死への憧れではない。このような職業上の悲惨さを、精神的に変えようと望んでいること。(Petsch)。

独白の第一部が、下降する調子で終わったあとで、今度は深く呼吸するような „Ó sähst dú, vóller Móndenschëin" によって、力強く高揚する動き

と、別の姿勢によってのみ実現され得る新しい調子とが始まる。(Arens). V. 386—97は素晴らしい詩的な *Intermezzo* であるが、V. 398で胸に浮んでくる境遇によって、突然中断される。魔術の件に詳しいゲーテは、満月を意識して場面に挿入する。民衆本でも Faust は、満月のときに悪魔を呼び出す。月はあらゆる時代の魔術に於て、極めて大きな役割を演じている。Mephisto の月の処方については vgl. V. 6325ff. (Endres).

V. 386—429では、カデンツは männlich. (V. 394—97だけは weiblich). 従って詩行の末尾の *Hebung* が、次行の初めの *Senkung* と出会うことによって、強弱の交替が詩行の区切りを越えて続く。これは Faust の興奮を表現する話のテンポを高めるという効果がある。(Ciupke).

388. Den — — 関係代名詞。先行詞は 2 行上の *Mondenschein*. so — — Füllwort. manche *Mittelnacht* — — 4 格の副詞。
389. herangewacht — — heran|wachen = wachend abwarten. (Fischer). so lange wachen, bis das Objekt erscheint. (SWb). 末尾に habe を補う。
390. Dann — — そういうとき。Büchern — — Pl. 3 格なので Papier も Papier(en). „Urfaust“, „Fragment“ では Bücher と 4 格になっている。3 格に改めたのは「お前 (月) の光が、ここに坐って (魔法の) 本や原稿用紙を拡げている私を見出した」という意味を、より一層明らかにするためである。棚の上の本や紙類の意味なら、4 格が要求される。Papier は魔法の研究のために、スケッチする用紙。(Thomas).
391. Trübsel'ger Freund — — 2 行下では „In deinem lieben Lichte“ になっている。月は目覚めている者の気分に応じて、物悲しい友にもなれば、好ましい友にもなる。ゲーテにはこの場合のように、月に呼びかけることによって、独り言から対話になる傾向がある。(Trend.). erschien — — <erscheinen = sachtbar werden, zum Vorschein kommen. 現われる、目の前に見えてくる。(Fischer). V. 66 の erpflegen, 486 の eratmend と同様に、意味を強める、同じ意味の合成語。(Witkowski). 英訳ではこの 2 行は: „I saw you, melancholy friend, appear/Above my books and papers — (Atkins).
- 392f. könnt' ich doch ... gehn — — wenn ich doch ... gehen könnte. 接続法 II. 非現実の願望。できたらよいのだが。この könnt' は V. 397までかかる。Bergeshöhn — — Bergeshöhen. 山頂。Faust の憧れは死後初めて満たされる。死後の世界には山岳があり、洞窟には聖者たちがいる。漂う霊たちも

- いる。Faustの不滅の霊が上昇して行く。(Arens).
- 394—97. Um Bergeshöhle ... gesund mich baden — 古典古代の伝承によれば、幾つかの洞窟には Dämon たちが住んでいて、その洞窟のそばで、神託を乞う祈りが捧げられていた。この洞窟について、Werther が語っている Ossian の世界が、より新しい関係を示している：„Zu wandern über die Heide, umsaust vom Sturmwinde, der in dampfenden Nebeln die Geister der Väter im dämmernden Lichte des Mondes hinführt. Zu hören vom Gebirge her, im Gebrülle des Waldstroms, halb verwehtes Ächzen der Geister aus ihren Höhlen". vgl. „Die Leiden des jungen Werthers" II, 12, 10. (Gaier). V. 3235ff. の Die „silbernen Gestalten der Vorwelt" は、ここで言われている „Geistern" と同一である。(Witkowski). この 4 行は weibliche Kadenz. (Ciupke).
395. Dämmer — Dämmerung, Zwielficht. 18世紀の後半に „dämmern" から新たに作られたもので、詩的表現として、ゲーテによって最初に用いられたらしい。vgl. Urfaust V. 42. (Fischer). weben — reim によってのみ schweben と結びつくことがある。そのときの意味は、schweben に極めて近い。(Grimm). = sich ergehen. (Fischer).
396. Wissensqualm — durch eine Masse unverdauten Wissens hervorgerufene Unklarheit. (Fischer). 学問の窒息ガス。(Thomas). 知識の過剰はむしろ眼を曇らせる。(Reclam).
397. gesund mich baden — gesund は結果を示す。„bathe to health". (Thomas). 露は地上の極めて広い領域で、生命の水の一種とみなされている。(Endres).
398. stecken — als gefangener festgesetzt sein. (Grimm). 以下 V. 417までは、Faust の生活の不自由さと窮屈さを、嫌悪を以て強調する。(Arens).
399. Mauerloch — durch Mauern gebildetes Gefängnis. 前行の Kerker のこと。(Fischer).
400. Wo — 関係副詞。前行の Mauerloch を受ける。V. 402までかかる。Himmelslicht — Sonne und Mond. (Fischer). ゴシック様式のステンドグラスを通ると、太陽の Himmelslicht と同様に、voller Mondenschein (V. 386) も、Trübsel'ger Freund (V. 391) の光になるほど暗くなる。(Schöne).
401. durch ... bricht — durch etw dringen, mehrf vom Licht. (光が) 通って差し込む。(GWb).

402. beschränken — an freier Ausdehnung hindern. (Fischer). einengen, beengen ; PartPrät auch iSv eng, bedrückend ; symptomat für geistige Enge, Enge des Lebensstils. (GWb). 高い壁際の大きな書架に、本が一杯つままっていて、Mauerloch を狭くしているという描写。ここで交差韻の四つの詩行が再び始まる。(Düntzer). = Von diesem Bücherhauf beschränkt (ist).
403. Den — 関係代名詞で、nagen と bedeckt の補足語。先行詞は前行の Bücherhauf. 次行の Den も同じ。Würme — wurm の mhd. の複数形. bücherwurm. (Grimm). 現在では Würmer. ゲーテは両方とも用いた。vgl. V. 605, 2176. (Heffner).
- 403—17. 16世紀のある学者の研究室の描写。(Schröer).
404. Den, — umsteckt の補足語。(von unten) bis ans ... hinauf.
405. angeraucht(es) — von Rauch geschwarzt. (Fischer). angeraucht — 詩では1格や4格の中性単数の場合、1語前の限定形容詞は、語尾 -cs なしによく用いられる。vgl. V. 28: „lispelnd“. (Heffner). Papier — 集合名詞。煤けた文書、紙の束、原稿などを丸めたもの、講義ノートや棚の中にたまったり、突っ込んだりしたような物。(Heffner). 周囲の壁に貼りつけたり、本と本の間に挿し込んだりした紙類。angeraucht については vgl. V. 678f. (Schöne). 煤けた紙が周囲の Bücherhauf の中に挿し込んである。„Urfaust“ ではここは „mit angeraucht Papier besteckt“ になっていて、この besteckt は Mauerloch にかかっている。„Faust“ 決定稿のこの書き換えは、状況を曖昧にしている。(Thomas). umstecken — untrennbar. etwas mit etwas umstecken (es damit ringsum bestecken). (Grimm).
- 406—08. この3行は Mauerloch (Kerker) にかかる。umstellt, vollgepfropft, gestopft のあとに、夫々 ist を補う。umstellen — untrennbar. etwas (mit etwas) umstellen (es mit etwas, das man hinstellt, umgeben). (Grimm). pfpfen — stopfen. (Fischer). drein — obendrein = noch dazu, überdies. (Fischer). ここは Faust の父の書齋、研究室だった所で、彼の父は化学者、物理学者として、必要な道具類を持っていた。vgl. V. 1034—55. Urväter は、部屋の中身は Faust 家の更に古い世帯から、ある程度伝わったのだろう、ということを暗示している。(Heffner).
409. Das ist deine Welt! — これがお前の世界なのだ! sein は現実のことを言う。das heißt eine Welt! — これが世界というものなのだ! heißen は言われている、呼ばれているということで、man nennt と同じ。他の人

からもそのように見なされていることを言う。

Faust は自分に重々しく呼びかけながら、„deine Welt" と言うとき、今まで踏み越えることのなかった自分の生活圏 (V. 2058) と、その中の自分を、突然外部から見るように新しい目で見ると。この分裂は V. 427 まで続いて、10 回自分を 2 人称で語る。それから „ich" に戻る。(Arens).

この詩行の韻律は：

Das ist deine Welt! das heißt eine Welt!

Jambus の Vierheber は、Trochäus の導入部と二つの Spondeus を持つ、この詩行によって中絶される。Trochäus の導入部に基づいて、衝動的に始まるこの詩行のうちに、自分の状況と自分の世界に対する、Faust の切迫した不満が聞きとれる。(Ciupke).

410—13. 要するにこれは精神病の症候群であり、すでに V. 370 で、あらゆる生の喜びの喪失によって暗示されているが、更に V. 644—46、650f. に於て、憂い (Sorge) の作用として新たに表現されている。(Arens).

411. sich klemmen — geklemmt sein. (Grimm). klemmen — innerlich bedrücken. (Fischer).

413. Dir alle Lebensregung — Deine alle Lebensregung. V. 410—13 の韻律は：

Und frágst du nóch, warúm dein Hérz

sich báng in déinem Büsen klémmt?

Warúm ein únerklärter Schmérz

Dir álle Lébensrégung hémmt? (Trunz).

414. 上 4 行の間に答えるのが V. 414—17 なので、V. 414 の前に例えば „so wisse" を補う。(Trend.).

415. Da Gott ... hinein — In welche Gott die Menschen hineinschuf. (Thomas). 例外的に聖書の創造神について語っている。(Arens).

416f. Umgibt — nur Tiergerippe und Totenbein が主語なので、Umgeben が普通。Totenbein — Totenknochen. 医学教材用の Skelett. (Trunz).

418. Flieh! — 命令法。auf! — Aufforderung, sich aufzumachen und davonzugehen. (Fischer). vgl. V. 4597. Auf! Hinaus と大文字の版の方が多い。hinaus — nach außen od. draußen hin ; im Ausruf. (Fischer). しかし Faust は机の前に坐ったままである。この矛盾は Faust 自身の中にある。つまりこれが Faust の以前からの生活様式なのである。(Gaier). 広い (Geister-) Land, Geisterwelt の中へ、死せる書物の教えを脱して、生きた自

然の教えの中へ入れということで、研究室から自由な自然の中へ逃げると、宇宙の秘密が分かるという意味ではない。(Trendl.)

韻律は：Flieh! auf! hinaus ins weite Land!

冒頭の Spondeus は、Faust の感情的な興奮を暗示している。(Ciupke).

419. Und — Aber と殆んど同じ。(Gaier). dies — dies(es). Buch は 2 行下の genug と押韻する。vgl. V. 2901—02.
420. Von Nostradamus' eigner Hand — Von eigner Hand des Nostradamus. Nostradamus — Michel de Notredame (1503—66) のラテン名。有名なフランスの占星術師、医師。彼の最も有名な仕事は、„Centuries" のタイトルで、1555年に刊行された韻文の予言集である。ここで Nostradamus の作とされている種類の本を、彼は書いてはいなかった。もしかしたら彼の原稿を持っていたかも知れない Faust と同時代の、代表的な占星術師の名前として、ゲーテは彼の名前を利用している。(Thomas).
421. es — 2 行上の dies geheimnisvolle Buch. Geleit — Begleitung ins neue Leben, Führerschaft ins Reich der Geister. (Arens).
422. Erkennest — (Du) erkennest. erkennen = begreifen. (Thomas). dann — V. 424の Dann と共に、V. 423 の wenn を受ける。(青木). der Sterne Lauf — den Lauf der Sterne.
423. 霊は言葉によらずに、考えやイメージ、好意や嫌悪などを伝えることによって、活動範囲について語り合う。考えを伝達するこの能力は、自然が教える事柄ではない。(Gaier).
424. Dann geht die Seelenkraft dir auf — Swedenborg (1688—1772) の決り文句の逐語訳で、見霊者と認められた人の啓示を意味する。(Witkowski). geht ... auf — aufgehen = sich öffnen. (Grimm). zum Bewußtsein kommen. (Fischer).
425. Wie spricht ein Geist zum andern Geist — Wie wenn ein Geist zum andern Geist spricht. 霊が互いに語り合っているときのように、霊の力がお前に開かれる。Swedenborg によれば、霊は考えを直接伝えることによって互いに語り合う。(Witkowski).
- 426f. Umsonst, daß — (Es ist) umsonst, daß. hier — Die heil'gen Zeichen hier (in dem Buch). (Witkowski). Die heil'gen Zeichen — magische Runen, Hieroglyphen. (Reclam). 啓示はより高度の靈感によってのみ獲得される。そしてこの啓示によって、聖なる符号 (Zeichen) が理解される

のであって、Faust 自身の思考力、つまり „trocknes Sinnen" によるのではない。Faust は啓示が自分に与えられたことを、そして霊たちが自分に近づいてきたのを感じずる。(Witkowski).

428f. Faust は壁に囲まれたかび臭い牢獄の中で、突然霊の世界に向かう。本に描かれた抽象的な図形が、自然にとって代る。(Arens). Antwortet — ihr に対する命令法。Swedenborg によれば、霊は至る所に存在するが、相応しいと認めた者にだけ返事をする。(Alt). 韻律は：

Ǟntwörtet m̄ir, wenn ihr m̄ich hör̄t! (Ciupke).

429+ schlägt ... auf — aufschlagen. Zeichen des Makrokosmos — ギリシャ語に由来。= große Ordnung, Weltall. ゲーテが知っていた全智学や錬金術の文献には、さまざまなイラストが描かれている。それは幾何学的な図形や、四大と惑星の魔術的、神秘的象徴によって、「すべてのものが全体に組み合わされている (V. 447)」ように、描かれたものである。ゲーテは特に1769年頃、Klettenberg のサークルで、このような理論 (Paracelsus, van Helmont, von Welling u. a.) と取り組んだ。そしてのちに „Dichtung und Wahrheit" のために書き留めている (Paralipomena 73) : „Indessen beschäftigte mich die Bearbeitung solcher gestaltlosen Vorstellungen einige Zeit lang indem ich sie, durch eine Art mathematischer Symbolik, nach Weise meiner Vorgänger zu versinnlichen strebte, und die unorganischen Wesen, mit denen ich mich mehr alchymisch als chymisch beschäftigte, dadurch zu begeistern trachtete". (Schöne).

この引用文から、1769年2月13日の Friederike Oeser 宛書簡で、「私は哲学に没頭していて、そのためにコンパス、紙、ペンを使っている」というゲーテの文面が理解される。何れにせよ Makrokosmos の Zeichen の場合、16世紀から18世紀まで存在した、このような図式によるスケッチの一般的なタイプが、恐らく Faust の眼前に浮んでいるのであろう。Makrokosmos は図式として、スケッチで表現することができる一つの理念である。この理念を呼び出すことはできない。

従って16世紀から18世紀までの文献の Makrokosmos は、どんな種類の霊であろうと、霊とは全く別のものである。„Faust" では常に起ることであるが、16世紀のモチーフが、ここでゲーテ自身の考えと手を組んでいる。ゲーテは Neuplatonismus と常に結びついていた。16世紀から18世紀まで、よく引用された全智学の要点：„Omnia ex uno, omnia ad unum" (alles



- aus einem, alles zu einem) は、V. 447と類似している。(Trunz).
- 430—54. Makrokosmos の Zeichen による Faust の経験は、地霊経験と同様に、Agrippa の „Begeisterungen" (furores) の理論によって、正確に記述されている。また Faust の挫折の原因も、この理論によって説明される。vgl. R. Chr. Zimmermann 1969—79, Bd. 2, S. 94. (Gaier).
- 430—41. 以下に於て主語の „ich" は 2 回しか現われない。Faust の体験は思いがけない出来事として、„mir" で表現されている (mir fließt, mir rinnen, mir stillen, mir wird so licht). (Arens).
430. in diesem Blick — Mit, durch diesen Anblick. これを見ると。この句に直ちに反応して、V. 467まで Madrigalvers になる。(Schöne).
431. Sinnen — 古い弱変化の Pl. vgl. V. 479, 1436, 1633. 強変化の Sinne は V. 611, 1594, 1805. (Thomas). alle Sinnen — 五官。ここでは夢の中のように、すべての感覚が言及されている。視覚だけでなく、嗅覚 (V. 451)、聴覚 (V. 453)、感覚 (V. 455f.)、味覚 (V. 459). (Arens).
432. junges, heil'ges Lebensglück — 4 格。次行の rinnen の主語。heiliges Lebensglück — heilig という言葉は、ゲーテによって (晩年に於ても時々) „höchst wertvoll, heilbringend, aus Gottes Weltordnung stammend" という意味で用いられている。宗教的な背景が折にふれて明らかなのが、V. 1202、1222、2699、2820、弱いのが V. 4633、4643、7378、欠けている場合は殆んど一つもない。ここではそれは V. 434によって暗示されている。(Trunz).
433. Neuglühend — Zu einem neuen Wesen schmelzend の意。„Urfaust" では „Fühl neue Glut". (Arens). mir durch Nerv' und Adern — durch meine Nerven und Adern. Nerv' — 省略された語尾については vgl. V. 238, 279. (Heffner).
434. es — 関係代名詞 der の先行詞。
435. Die — 関係代名詞。V. 438までかかる。先行詞は前行の diese Zeichen. mir das innere Toben — mein inneres Toben. 牢獄の壁に囲まれた生活 (V. 398ff.) に対する、Faust の胸中の Toben. (Arens). stillen は次行の füllen と韻を踏む。(Heffner).
437. Trieb — Antrieb. (häufig bei Goethe in der jetzt gewöhl. Verwend.) von unwillkürlichen seelischen Regungen. (Fischer). ほぼ potency の意。(Thomas).

439. Bin ich ein Gott? — すべての神秘家や予言者たちが、靈感の閃きを感じたように、霊や天使たちの声を聞く前に、Swedenborg が何度も光を体験したように、今や Faust に与えられる光の体験によって、„War es ein Gott?“ (V. 434) が、„Bin ich ein Gott?“にまで高められる。これは決して思い上りではない。Faust には崇高な、感動的な感情を表わす他の言葉が見つからないだけである。„Bin ich ein Gott?“ は神学的に解釈してはならない。また自分は詩人や芸術家としては、多神論者であるというゲーテの告白 (an Jacobi am 6. 1. 13) の意味でも解釈してはならない。これは „Sturm-und-Drang-Stil“ として解釈すべきである。(Arens).

Mir wird so licht! — Mir wird (es) so licht! So — sehr. licht — hell, klar in bezug auf erkenntnis und verstehen. (Grimm). 心がとても澄んでくる。明るくなる。

440. schauen — erkennend sehen. (Fischer). in diesen reinen Zügen — in diesen reinen Zügen des Makrokosmos-Zeichens. (Gaier). Zügen — Schriftzug, Linienführung. 文字、線、スケッチ。(Fischer). Zügen は次行の liegen と韻を踏む。(Heffner).

441. Die wirkende Natur — 4 格. liegen の主語。= die ewig bauende, ewig zerstörende Tätigkeit der Natur. (Trend). wirkend — im sinne „schöpferisch tätig“. (Grimm). „Urfaust“ では würckende.

442. der Weise — Faust はもしかすると、Nostradamus (V. 420) のことを考えているのかも知れない。しかしこれは見霊者一般に当てはまる言葉である。ゲーテは J. Böhme の „Aurora“ や、Herder の „Älteste Urkunde des Menschengeschlechts“ などを知っていた。: „Komm hinaus, Jungling, aufs freie Feld und merke. Die urälteste, herrlichste Offenbarung Gottes erscheint dir jeden Morgen als Tatsache“. (Reclam).

Nostradamus と同一人物かも知れないが、ここでは誰かある匿名の著者が言われているのではなくて、超個人的な権威がイメージされているのは明らかである。(Schöne). 他に Swedenborg とする説、それは誤りとする説、また Hamann や Oetinger などの影響の指摘もある。

445. Auf — Aufruf zu Arbeit. (Fischer). bade — 接続法 I. Schüler に対する命令法。Schüler — vgl. V. 363. unverdrossen — ohne sich durch irgendwelches Bedenken zurückhalten zu lassen. (Fischer).

446. Die ird'sche Brust — bade の補足語。Morgenrot — 創造の奇蹟や、

太古の輝やかなしい神の啓示を、事実として体験させるもので、Swedenborg や Herder の影響が認められる。(Witkowski). 占星術の文献では、宇宙の直観的な知識の象徴である "Aurora" のこと。(Heffner). このあとに „einer höheren Erkenntnis" を補う。(Königs). „Das Baden im Morgenroth" というのは、„Studium der Magie" の最高の表現である。(Loeper). この願望は第 2 部の冒頭で実現される。Faust は „anmutige Berglandschaft" に横たわって、Morgenrot の中で新しい生に目覚める。(Schröer).

447. sich weben — sich zusammenfügen. (Grimm). ここから対韻 (Paarreim) が 2 回続く。(Düntzer).

448. wirkt — „Urfaust" では würkt. vgl. V. 441. ここは gegenseitige Abhängigkeit の表現。

449. Himmelskräfte — die Naturkräfte darstellende himmlische Geister. (Fischer). himmlische, die welt regierende kräfte. (Grimm). Engel? Geflügelte Mischgestalten? Beschwingte Weltkörper? 何れにせよ、確かなイメージを得るのは困難。(Trendl).

447—53. 最初の 5 行については、満足の行く説明をすることはできない。主語は „Himmelskräfte" である。しかしながらすべての発言が、同じ Himmelskräfte についてなされている、と仮定するならば、意味のあるイメージが生れることは全くないだろう。むしろここは、異なる Himmelskräfte について語られているのである。即ち、黄金の桶を持って、登ったり降りたりしている Himmelskräfte, 大地を通り抜ける翼のある Himmelskräfte, 森羅万象の中で、調和した響きを生じさせる Himmelskräfte などである。ここでは明らかにさまざまな考えが結びついているが、メタファーの要素は余り多くはない。(Arens).

447—53. Makrokosmos-Zeichen に対する、Faust の neuplatonisch-pansophisch 風の発言の背後には、二つの大きな、古い神秘的なイメージのプログラムがひそんでいる。„segenduftende Schwingen" を持つ „Himmelskräfte" は、Jakob の夢を示している。1. Mose 28, 12f. : „Und ihm (Jakob) träumte; und siehe, eine Leiter stand auf erden, die rührte mit der spitze an den himmel; und siehe, die engel Gottes stiegen dran auf und nieder. Und der Herr stand oben drauf..." そしてこの聖書の Himmelsleiter を、人はすでに中世にはもう Homcr の黄金の鎖と同一視していた。つまり 3000 年を通して繰り返し取り上げられ、手を加えられてきた — 宇宙の垂直な関連に

対する —— 古典古代のイメージの決まり文句と同一視していたのである。  
vgl. „Dichtung und Wahrheit“ 8. Buch : „Mir wollte besonders die Aurea  
Catena Homeri (Goldene Kette Homers) gefallen, wodurch die Natur, wenn  
auch vielleicht auf phantastische Weise, in einer schönen Verknüpfung  
dargestellt wird“. (Schöne).

450. sich ... reichen —— gegenseitig reichen. die goldnen Eimer —— 4 格。in  
Fausts Vision des Makrokosmos wohl für Lichtgefäße (=Gestirne?) in einer  
Kontamination von Bildern bes pansoph u bibl Herkunft. (GWb). 光の入れ  
物、輝やく天体。(Reclam). Himmelskräfte も Eimer も、絶えず登ったり降  
りたりして動いている。自分が登ったり降りたりしているときに、何のた  
めに Eimer を先に手渡すのか? ここでは両立しないことが言われているこ  
と、Faust の Vision は、分かり難い空想に価値を低下させている、という  
ことに注目すべきであろう。(Arens).

Faust の詩節に於ける詩行のパターンの変化は、押韻構成を保持する一  
方で、規則正しい 4 強音の詩行 (Knittelvers) の間に、5 強音或いは 6 強  
音の Jambus 詩行を配置することによって、達成されていることが多い。  
この 4 行の韻律は：

Wie álles sích zum Gánzen wébt,  
Éins in dem ándern wírt und lébt!  
Wie Hímmelskráfte áuf und níeder stéigen  
Und sích die góldnen Éimer réichen! (Heffner).

451. Schwinge —— Flügel (eines Vogels). (Fischer). Mit segenduftenden  
Schwingen —— Mit Flügeln, die den Duft des Segens verschenken. こ  
から 3 重韻になる。(Düntzer).
453. all das All —— das ganze All. durchklingen —— tr. untrennbar. ganz mit  
Klang erfüllen. (GWb). ここでは Sphärenharmonie が話題になっている。  
従ってこのイメージは、万有の中に浸透する神的な力の働きを表わしてい  
る。これは新プラトン主義的、パンソフィア的な考えである。(Trunz).
454. Welch Schauspiel —— Welch (ein) Schauspiel. (Grimm). ein Schauspiel  
nur —— nur ein Schauspiel. Schauspiel —— Makrokosmos の Symbol は、  
結局のところ見せ物にすぎず、現実ではない。自然そのものではない。  
(Heffner).
- 454-59. 第一部の初めの所で、Faust は Makrokosmos そのものを求めるので、

Makrokosmos の Abbild では満足しないけれども、第二部の初めの所では、Leben の „farbigen Abglanz" で満足しなければならない、ということを確認する。(V. 4727). Schau-Spiel に対する不満は、あらゆる生命の源泉への、生の根源そのものへの欲求を呼び出す。... Wilhelm Meister の謙虚さと、Faust の傲慢さの相異は著しい。(WMW, 1. Buch, 10. Kap.). (Arens).

455. unendliche Natur — 1 格。
456. Euch Brüste, wo? — Wo (fass' ich) euch, die Brüste? die Brüste は 1 格。17・18 世紀の自然科学の本では、自然はしばしば多くの乳房を持った女神像 (Isis) として描かれている。vgl. V. 1892f. (Heffner). Makrokosmos の Zeichen を見ているとき、Faust の魂の前に現われる霊は、無限の運動のイメージを Faust に見せるだけで、その運動の原因は Faust には明かされない。生命を産む Urmutter としての自然とその乳房 (Ephesus の Diana) は、Faust には永遠に近づき難いものである。なぜならここで問題になっているのは、超感覚的な領域に在り、従って人間にとっては永遠に解き難い問題なのだから。vgl. Iesaja 66, 11: 彼女の慰めの乳房から飲んで、飽き足り、豊かな乳房に養われ、喜びを得よ。(Witkowski).
457. denen — 関係代名詞。先行詞は Quellen. an et.<sup>3</sup> hängen.
458. Dahin — Wohin. (Heffner). Quellen の方へ。die welke Brust — それを見ようと思ひ焦られる Faust 自身の胸。vgl. V. 446. (Düntzer). welk — nach Erfrischung lechzend. (Fischer).
459. ihr tränkt — ye give to drink. お前たちは飲物を与える。(Thomas). schmachten — 極度の空腹と渇き、高度の憧れ、渴望を感ずること。(Adelung). von quälenden körperlichen verlangen, sich verzehren im begehren nach etwas, dahin welken, vergehen im mangel an etwas. (Grimm).
- 459+ schlägt ... um — um|schlagen. unwillig — Faust が腹を立てて頁をめくるのは、魔術師の精神と魂の準備に関しては、最初の落着きのない状態と同様に不利である。(Gaier). das Zeichen des Erdgeistes — Allerfühlungsdrang から Erderlebenslust へ、というこの突然の転回のうちに、Faust がのちに „zwei Seelen" (V. 1112-17) について語っていることが明らかになる。またこれは Mephisto による Faust の性格描写 (V. 304-07) にも対応している。Faust に於ける断えざる Aufundab のテーマが、ここにあらさまに揭示されている。そういうわけで Faust は、„das Zeichen des Erdgeistes" を見る。(Arens).

„Erdgeist" はゲーテがよく利用した Hederich の神話事典に記載されている (Benjamin Hederich : Gründliches mythologisches Lexikon 1770, S. 858) : Daemogorgon は専ら Erdgeist と呼ぶべきであり、あらゆる事物の最初の根源的な存在と言われている、三重の世界、即ち、天、地、海とそこに居るものすべてを生み出したものである。しかしその名前を呼ぶのは、本来は許されてはいなかった ... 地の内部に住んで、永遠と混沌を道連れにしていた ... しかしそれ自体としては、Natur と呼ばれるものに他ならなかった。(Schöne).

Erdgeist は „Faust" 執筆の最初の時期に属する。当時ゲーテは恐らく „Prolog im Himmel" のことは、考えてはいなかったであろう。Mephisto はどこから来るのか、また Erdgeist と関係があるのかどうかということは、Faust にはあとあとまではっきりしないままである。V. 1746f., 3217ff., S. 137, 16f., S. 138, 11f. は、Erdgeist に関係があるように思われる。(Trunz).

占星術によれば天体には靈魂が宿っているが、地球も同じである。こうした考えは、錬金術全体を支配している。Paracelsus (1493—1541) は、Archeus terrae (Urherm der Erde) について語っているが、Giordano Bruno (1548—1600) も、anima terrae (Erdseele) について語っている。文学に於ける Erdgeist の出現は、ゲーテが早くから存在全体の根本原理として認識していた、あらゆる有機的な生命の両極性を体現している。ゲーテ自身はこの一連の両極性のテーマを、韻文や散文などで、全作品を通して扱っている。Erdgeist は自らの両極性を、„Auf- und Abwallen", „Hin- und Herwehen", „Webegleichnis" という永遠な運動の三つの比喩で明らかにしている。(Beutler).

460. wirkt ... auf mich ein — auf jn. ein|wirken.

461. Geist der Erde — Paracelsus から Welling に至る文献で明らかなのは、天使は別として、悪魔が存在するという事、また Erde, Wasser, Feuer, Luft という Element と関係のある、性質の異なる Naturgeister が存在するという事である。Faust の呼びかけの言葉は、Geist der Erde である。Erde は Planet でも Element でもあり得る。16—18世紀までは、この二つの意味が混じり合っている。ここで明らかなのは、Faust が相対しているのは Teufel ではなくて、die weiße Magie の属する Naturgeist であるということである。地の靈は Naturgeist である。地靈の自己描写 (V. 501—09) は、大体に於てゲーテの Jugendhymnen のスタイルで書かれた、地上

の生活の崇高な描写である。地霊の場はゲーテの創作であり、四つの学部に失望した学者の独白や、Mcohisto との結びつきのような、古来の Faust-Stoff に属するものではない。(Trunz).

463. wie von neuem Wein — als wenn ich neuen Wein getrunken hätte. neuem Wein — frischem Wein. (Thomas).
464. zu wagen — 以下三つの zu 不定詞句は、共に Mut の付加語。sich in et.<sup>4</sup> wagen — 思い切って飛び込む。地霊の符と、Makrokosmos の符との観察の結果は異なっている。後者は Faust の魂を刺激して、霊の世界の並み外れた高みへと登らせる。前者は Faust を狩り立てて、地上の出来事の中へ活発に飛び込ませる。この二つのイメージは、それぞれ知識と行動に向かう人間の衝動の象徴である。(Heffner).
465. Der Erde Weh — Das Weh der Erde. der Erde Glück — das Glück der Erde.
466. Mit Stürmen mich herumzuschlagen — to grapple with the hurricane. (Atkins). sich mit et. herumschlagen. Faust の後の Weltfahrt は、ここですでに前以て示されている。これは認識の衝動と同様に、Faust の本質に相応しい。(Trunz).
467. in des Schiffbruchs Knirschen — in dem Knirschen des Schiffbruchs.
- 464—67. ここは一つの Reim で結ばれている。これによって以下の無韻の詩行 (V. 468—76) との、特に著しいコントラストが達成されている。(Ciupke).
468. Es — 非人称。sich wölken — sich bewölken. 霊が出現する前には霧が立ち込める。(Düntzer). 次行と合わせて、Alexandriner と見なしてよいだろう。(Thomas).
- 468ff. Madrigalverse はここで我を忘れた発言の特徴を示しながら、自由なリズムに移行する。霊を呼び寄せるのは (V. 468—90)、もともとこのような内心の憧れなのであるが、その他にも古い伝説の流儀や慣例に従って、悪魔を呼び出す呪文が唱えられる。(V. 481ff.). (Reclam). V. 468—81はその Ton に於て、若きゲーテの無韻で、自由なリズムの Hymnen を強く想起させる。(例えば Wandrers Sturmlied). (Ciupke).
470. schwindet ... geht aus. (Königs). 霊の光は、一時的に人間の点じた光を消滅させる。これは霊の出現の告知と見なされた。(Arens).
- 471—74. Pfingstwunder に於ける聖霊の出現に倣ったもの (Apostelgeschichte

2, 2-4). (Gaier).

- 472f. Mir um das Haupt — um mein Haupt. Es weht ... herab — Es は形式上の主語。Ein Schauerが真の主語。herab|wehen. Schauer — horror. 英訳では: „a dread chill flows down from the ceiling-vault". (Atkins).
474. faßt ... an — an|fassen. 主語は前行の Ein Schauer.
475. fühl's — fühle es. es は次の du schwebst um mich. du = erlehter Geist. vgl. V. 488 Seelenflehn.
476. Enthülle dich! — 命令法。sich enthüllen. 自由なりズムのあと、最初の脚韻のある二つの詩行に挟まれた、脚韻のない詩行。(Düntzer).
- 470-76. 地霊の呼び出し、Faustの信念の告白 (V.3431ff) — このような情熱のこもった感情的な言葉の個所は、自由なりズムになる。タクトの数は引用した7行では、2と5の間で変化している。HebungとHebungの間で、大抵は一つの、ときには二つの Senkungがある。三つあることもある。

Die Lámpe schwíndet!  
Es dámpft! — Es zúcken róte Stráhlen  
Mír um das Háupt — Es wéht  
Ein Scháuer vom Gewölb heráb  
Und fáßt mich àn!  
Ich fühl's, du schwébst um mích, erfléhter Géist.  
Enthülle dich! (Trunz).

V. 471-74に於てゲーテは、Zeilensprungを全く明白に用いている。このようにしてゲーテは、無韻によると同様に、Faustの興奮を見事に表現している。V. 468-76は無韻ではあるが、韻律論上は広範囲に整えられている。即ち、Hebungの数の自由な、Jambusの交替する詩行である。

Ës dāmpft! — Ës zücken rōte Stráhlen  
Mír um das Háupt — Ës wéht  
Ëin scháuer vom Gewölb' heráb  
Ûnd fáßt mích àn! (Ciupke).

477. wie's in meinem Herzen reißt! — wie reißt es in meinem Herzen! es は非人称主語。reißen — intr. 裂ける、破れる。
- 478f. Zu neuen Gefühlen ... sich erwählen! — Zu neuen Gefühlen erwählen sich alle meine Sinnen! この neue Gefühleは V. 614-21で言及されている。



- (Heffner). Sinnen は Sinne が普通。sich erwählen — im Inneren sich heftig erregen, aufgewühlt werden (zu). (GWB).
480. dir hingegeben — dir hingegeben (sein). Faust の言葉は、もともと自分の感情を表現しているのではなくて、自分の感情を味わっている (Genießen) ことを表現している。従って „ich fühle“ が繰り返される。Vgl. V. 462, 464, 475, (477f.), 480. Faust にとって真理と生命が存在するのは、感情の中だけである。感情が強ければ強いほど、ますます感情は真実になり、彼自身もますます活気づく。(Arens).
481. Du mußt! — Du mußt (erscheinen)! und kostet' es mein Leben! — und wenn es auch mir das Leben kostete! たとえ命に関わるとしても。(Schröer).
- 481+ spricht ... aus — aus|sprechen. das Zeichen des Geistes — Zeichen を神秘的に唱えるということは、それ自体神秘的であり、説明することは困難である。恐らくゲーテ自身具体的な考えを持ってはいなかったせいでろう。(Arens). 本の地霊のシンボルに呪文がついていて、この呪文が適当な状況の下で、相応しい人物によって唱えられると、霊が出現する。(Heffner). Faust は呪文をつぶやくが、この呪文は重視されてはいない。(Schmidt). 英訳では: „He takes the book and mysteriously utters the sign of the spirit“ (Atkins). „He seizes the book and pronounces the Spirit's mystic spell“. (Greenberg).
- Es — 形式上の主語。eine rötliche Flamme が真の主語。vgl. V. 471, Flamme は当然悪魔には付きもので、全 „Faust“ に見出される。Urfaust では Flamme のあとに、„in wiederlicher Gestalt“ という句が続く。この不快な姿というのは、ゲーテの本来の構想と全く一致している。のちになってこの霊が万物を利するもの、という性格を帯びたときに、ゲーテはこの句を消去した。(Thomas). 民衆本では、Faust の呪文によって呼び出される霊は、„Menschenkopf“ で姿を現わす。(Schröer).
- ゲーテはのちにこの場のスケッチでこの霊を、周囲を照らすアポロのような姿として表現した。そしてベルリンでの第一部の上演のために、燃えるような髪とひげをした Otricoli の Zeus の頭を、横断幕に (♀灯で) 見せるようにと助言した。(Arens).
482. Wer ruft mir? — rufen が補足語に 3 格をとるのは、曾ては一般に用いられた。Lessing, Wieland, Schiller に於てもまだ用いられている。今日

でも呼びつけるときの命令を強調する場合には、„dem Bedienten rufen" がまだ用いられる。(Witkowski). 地霊の最初の三つの言葉に含まれる „das rollende r" 音の効果は、もし柔らかな mich が用いられるなら失われる。殆んど滑稽な感じに一変するだろう。(Trend.).

abgewendet — sich abwenden. (Arens). Faust は „Wirkenskraft" を直接見ることは、人間には不可能であることを、ここですでに経験する。(Arens). Gesicht — nicht facies sondern visio, also = schreckenerregende Erscheinung. (Trend.). geistererscheinung. 霊の幻。(Grimm). schreckliches Gesicht の英訳は : „A fearful apparition!" (Atkins), „Appalling vision!" (MacNeice) など。

ゲーテはこの Faust の Vision に際して、予言者 Hesekiel の Vision の影響を受けたことが推測される。Faust によって観察された諸現象、即ち、Verfinsterung, Schauer vom Gewölb wehend, Feuer, Geisterscheinung in der Flammeなどは、Hesekiel 1, 4f. に従って方針が定められている。(Gaier). 483f. ここは口ずさんだ呪文だけでなく、その前の経過にも関連している。

„Wie anders wirkt dies Zeichen auf mich ein!" (V. 460) 以後、Faust は地霊と内的なコンタクトの中にある。vgl. MuR 435 : „Alles Lebendige bildet eine Atmosphäre um sich her". (Arens). Swendenborg によれば、どの霊も自分の回りに一定の領域 (Atmosphäre) を持っている。二・三の霊は人間の頭に吸いついてくる。天才的な力に満ちた人間が、霊の領域に吸いつくというのは、ゲーテによる変更である。(Buchwald). an meiner Sphäre — an der Sphäre des Erdgeistes, der Erde. (Schröer). an et.<sup>3</sup> saugen. 2 行とも現在完了。

485. Weh! — altgermanisch, als Ausruf des Schmerzes. (Fischer). = Oh, you're unbearable! (Greenberg).

486f. Du flehst — zu schauen, zu hören, zu sehen が補足語。eratmen — anhelare, schwer athmen, aufathmen, einathmen. (Grimm). (Vor Erregung, Anstrengung) tief Atem schöpfen. (GWb). atmen を強めたもの。vgl. V. 66, erpflegen. = du flehst aus tiefsten Innern. (Arens). 地霊は先ず Faust 同様 Madrigelvers (V. 477—500) で語る。勿論 Anapäst (∨∨-) の V. 487 は例外である :

Měině Stimmě zů hören, mēin Āntlitz zů sehn. (Ciupke).

488. neigt — bewegen herabzukommen, niederziehen. (Grimm). = Dein

- Flehen macht mich geneigt, bewegt mich, dir zu erscheinen. (Arens). mächtig  
 — mächtig(es).
489. Da bin ich! — Ich bin gekommen! erbärmlich — erbärmlich(es).
490. Übermenschen = dich. Übermensch は16世紀にカトリックの側から、ルター派の人々に対する Spotname として用いられたもので、より古い Adj. „übermenschlich" からの造語。18世紀には感情や思考能力に関して、平均的な人間を越えている人物を表わすようになった。(Erler). Nietzsche によってこの語は、的確に把握されてスローガンになった。vgl. Zarathustra (1883). (Grimm). ゲーテはまた „Zueignung" (1784) V. 61でも Übermensch を用いている。ここは = Welch Grauen faßt dich, der du über menschliches Maß hinaus willst. (Trunz). der Seele Ruf — der Ruf der Seele.
491. die — 次行の die と同じく関係代名詞。先行詞は共に Brust. sich は3格。erschaffen — schaffend hervorbringen. 創り出す。(Fischer). vgl. V. 66.
492. hegen — schützend bewahren. はぐくむ。(Fischer).
493. Erschwoll — <erschwellen. intr. = sich schwellend heben. この句は = sich schwellend (sich gleichsam aufblähend) zu unserer Höhe erheben wollte. (Königs). sich jm. gleich heben — 或人と同じ高さに立つ。V. 491—93 は主の前の Mephisto と同じく、地霊は Faust のことをよく知っているということを示している。(Arens).
494. des — 関係代名詞 dessen の古形。先行詞は Faust. (Heffner).
495. Der — 関係代名詞。先行詞は前行の Faust. sich an mich... drang — sich an ihn herandrängen. (Fischer). ゲーテは drängen の代りに、よく dringen を用いた。(Schröer).
496. der — 関係代名詞。先行詞は es. unwittern — wie mit einem Hauch (geheimnisvoll) umgeben. (Fischer). unwittert は過去分詞。in my aura. (Atkins).
498. Ein furchtsam weggekrümmter Wurm — sich wegkrümmen = sich krümmend abwenden. (Schröer). 身を縮めて脇へ向く。臆病に身を縮めて脇を向いた虫。(青木). furchtsam — furchtsam(er). Wurm は最低の生物。V. 653, 707で繰り返される。(Arens). ここは = Bist du es, dieser furchtsame (ängstliche) weggekrümmte Wurm?
499. Soll ich dir, Flammenbildung, weichen? — 私がお前に屈するとでも

言うのか？ Flammenbildung — in Flammen auftretende od. erscheinende Gestalt. (Fischer). 地霊の嘲笑は決定的である。力と行為によるのではなく、願望と自尊心の思い上りの中でのみ示される、Faust の所謂巨人主義はこうして片付けられる。だが Faust はもう一度反抗的な傲慢さへと狩り立てられる。Flammenbildung は明らかに軽蔑から出た言葉である。Faust が目の当りにしているのは Urelement である。(Arens).

500. Ich bin's — Ich bin es. es = Faust. deinesgleichen — ein Geist gleich dir. (Schröer). ein Geist wie du.

499f. 地霊に対する反抗心は、V. 499 の二重の Spondeus で表現されている。次行でも Spondeus によって強調された Ich が、地霊に対抗している：

Soll ich dir, Flammenbildung, weichen?

Ich bin's, bin Faust, bin deinesgleichen! (Ciupke).

501—09. 深さと美しさの点で尽きることのない個所。(Trend.). 生の理念と呼ばれ得るものの素晴らしい詩的な Vision. (Endres). 地霊の極めて詩的な自己描写。正反対の、相互に補足し合い強め合う言葉使いによる、短かく強く響くリズムで語られている。広範囲に胸中をぶちまけている結末は、織機の規則正しい物音を描写しているが、この壮麗な結末のたとえば、全体の思想の核心を示すものである。(Petsch).

地霊はこの地球のカテゴリーである時間の中で、あらゆるものを、永遠に交代する神性の衣として創造する。だがその神性に関しては、地霊は一定の力、若しくは現象形態にすぎない。こうして Erzengel が語っているように、あらゆるものを破壊する荒々しい地上の出来事は、世界の日の „sanften Wandeln" (V. 266) の中に吸収される。地霊と Faust は、汎神論的な意味に於ける神性について、極めて適切に語っている。(Arens).

501. Lebensfluten — Natur. Tatensturm — Mensch. (Trend.). In は „in the form of", im は „under the aspect of" の意味。(Thomas).

502. wallen — aufwallen, sprudeln, wogen ; heftig bewegt sein. (Fischer).

503. Webe hin — Webe (ich) hin. hin und her weben — intr. sich (vielfach) schöpferisch betätigen. (Fischer). weben — sich hin und her bewegen, wehen, lebendig sein, sich zeigen und wirksam sein. der gebrauch dieses wortes beruht hauptsächlich auf Luthers bibelsprache. (Grimm).

„Urfaust", „Fragment", 第一部初版(1808年)では „Webe". 以後の版では „Wallen" が „Lebensfluten" に対応するように、„Tatensturm" には

- „Wehen" が対応するとして、„Wehe" とする版がある。(Schöne). „Wehe" は Weimar 版、Schöne, Loeper, Thomas など少数。„Wehe" は1816年以後の版に紛れ込んだ悪い解釈。決め手になっているのは、„Sturm" のイメージではなくて、力に満ち溢れた存在や活動のイメージなのである。„weben" は古くはこの意味で好んで用いられている。vgl. V. 395, 2715, 4399. vgl. Apostelgeschichte, Kap. 17, 28 : „Denn in ihm (Herrn) leben, weben und sind wir". (Petsch). この2行の英訳は : „I surge and ebb, / Move to and fro!" (Atkins).
- 504—07. Geburt, Grab ... 以下の名詞は ich と同格である。(Thomas).
- 504f. 誕生と死の永却回帰が、Ebbe と Flut にたとえられている。vgl. den Aufsatz „Die Natur". (Witkowski). この2行の英訳は : „As cradle and grave, / As unending sea," (Atkins).
506. wechselnd — wechselnd(es). Weben — der substantivierte inf. (Grimm).
507. glühend — glühend(es). この2行の英訳は : „As constant change, / As life's incandescence," (Atkins).
508. schaffen — schaffend hervorbringen, schöpferisch tätig sein. (Fischer). am sausenden Webstuhl der Zeit — 手織機の技術と、Gott-Natur の活動に対する織工のたとえ。vgl. V. 1922—27. (Schöne). 地霊は Sein については語らず、常に Werden についてのみ語る。彼は Raum ではなく Zeit の中に住む。(Schröer).
509. wirken — früh und besonders obd. noch in heutiger schriftsprache erhalten im sinne „weben". (Grimm). der Gottheit lebendiges Kleid — lebendiges Kleid der Gottheit. Kleid — Naturerscheinungen. (Schmidt). 根元的な生命の諸現象は、人間の眼には見えない神の衣装として、古代から表現されている。(Düntzer). Gottheit — Gott selbst. (Fischer). vgl. psalm. 104, 2 : „Licht ist dein (des Herrn) Kleid, das du anhast." (Gaier). この2行の英訳は : „I work at the whirring loom of time / And fashion the living garment of God." (Atkins).
- 501—09. 地霊はまさしく韻律を弄んでいる。こうして Faust は自分と同じではない (V. 512f.) ということ、韻律の上で明らかにしている。このことは地霊の有名な自己描写に於て、特に明白になる。V. 501の Jambus 詩行 (勿論2番目の Hebung のあと、二つの Senkung が続く) のあと、Tro-

chäus の詩行が 2 行続く。それからまた 4 行の Jambus 詩行になる (V. 505 は最初の Hebung のあと、二つの Senkung が続く)。締めくくりは二つの Daktylus 詩行である：

In Lebensfluten, im Tatensturm  
 Wäll' ich auf und ab,  
 Webe hin und her!  
 Geburt und Grab,  
 Ein ewiges Meer,  
 Ein wechselnd Weben,  
 Ein glühend Leben,  
 So schaff' ich am sausen Webstuhl der Zeit  
 Und wirke der Gottheit lebendiges Kleid. (Ciupke).

- 510f. Der du ... fühl' ich mich dir ! — (Du,) geschäftiger Geist, der du die weite Welt umschweifst, wie nahe fühle ich mich dir! der — 関係代名詞。du は先行詞を繰り返したもの。geschäftig — (anhaltend, unentwegt) tätig, mit etw (sehr) beschäftigt; mit dem Nebensinn des Rastlosen. (Gwb). umschweifen — untrennbar. schweifend umkreisen, hin und her fahren. (Heyne).

Faust の返事は地霊の発言から、言葉だけを取り上げていて、地霊を全く理解してはいない、ということを示している。その結果 Faust は地霊の仮借ない返事を挑発することになる。この 2 行は異なる存在の本質、及び思考のカテゴリーを、簡潔に描き出している傑作である。その上 Faust の混乱を改めて証言するものである。ここでは „Betriebsamkeit“, „lebhaftes Bemühen“ を意味する geschäftig よりも、一層不適切なのは、恰かも地霊が休みなく地球の回りを回っていて、生命の力として、地球の中で活動してはいないかのような umschweifst の方である。(Arens).

Geschäftigkeit は 18 世紀に於ては、思慮を欠いた、疎外された活動のことである。従って骨を折って目的を遂行する仕事や、創造的で自由な活動とは対立するものである。(Gaier). Faust は世界をさ迷いめぐり、休みなく仕事を続けている自分の姿を、地霊に投影している。(Schöne).

512. den — 関係代名詞。先行詞は Geist. begreifen — geistig erfassen, erkennen, verstehen. (Fischer). begreifen はここではヨハネによる福音書 1, 5 と同じ意味である：„Und das Licht scheint in der Finsterniß, und die

„Finsterniß haben es nicht begriffen.“ (Gaier). gleichen — von innerer übereinstimmung des charakters. (Grimm). gleichst — Geist — begreifts によって、3 回鞭打たれるように、Faust は厳しく退けられる。(Arens). 地霊の本質はUmherschweifen と Beschäftigtsein に在ると Faust は考えて、地霊の目的を追求する、創造的な活動を理解しない。(Königs).

513. Nicht mir! — (Du gleichst) nicht mir!
514. Nicht dir? — (Ich gleiche) nicht dir?
515. Wem denn? — Wem (gleiche ich) denn? この間に対するドラマチックでユーモラスな答が、Wagner の登場である。なぜなら Faust はここではまだ、Wagner の生来の学者気質を越えてはいないからである。(Schröer).
516. Ich Ebenbild der Gottheit! — (Ich, der) ich Ebenbild der Gottheit (bin)! 前行の (ich) にかかる。Gottheit — als Bezeichnung für den christl bzw bibl Gott. (GWb). Faust は人間である自分は、神のように見えるという、広く流布している誤まった見解を抱いている。この見解は 1. Mose 1. 27 による: „Und Gott schuf den Menschen ihm zum Bilde, zum Bilde Gottes schuf er ihn.“ 1. Mose 2. 7 では全く別の表現になっている: „Und Gott der Herr machte den Menschen aus einem Erdenkloß.“ (Endres). „Ebenbildlichkeit“ の教義は、初期キリスト教以来、教会の教義の構成要素だった。16・17 世紀にはしばしば論じられた。Nachbild, Abbild はどのように理解せねばならないかということは、しかし未解決のままであった。(Trunz).
517. nicht einmal dir! — (Ich gleiche) nicht einmal dir! 地霊は神の下に位置する。人間は神の似姿である。従って Faust は地霊より上位でなければならぬと考えている。(Reclam). Es は非人称。
- 514—17. ここは自由なリズムの不規則な、無韻の調子で、この場合全く適切に聞える:  
Nīcht dīr? / Wēm dēnn? / Ich Ēbenbīld dēr Gotthēit! / Ũnd nīcht ěimāl dīr! (Ciupke). ここは崩折れる Faust の言葉によるサインである。(Schöne).
518. Tod! — im Ausruf unangenehmer Überraschung. (Fischer). = Tod und Teufel! 此畜生奴。忌々しい。(青木)。ich kenn's — ich kenne es. es はノックをしている人物。Famulus — Gehilfe, Assistent (auch älterer Student) eines Universitätslehrers. in Faust I für Wagner, die platt-rationale Kontrastfigur zu Faust. (GWb). Faustsage の伝統的人物。ゲーテはこの人物を、本来の敵対者 (Mephisto) が登場するまで、Faust の対照的人物と

して用いている。その後は（第一部では）無用になる。(Heinemann).

519. Es — 形式上の主語。真の主語は *mein schönstes Glück. zunichte werden — zu nichts werden.* 無に帰する、台無しになる。首尾一貫しないこの *Vers* の代りに、„*Urfaust*“ では全く自然な „*Nun werd ich tiefer tief zu nichte.*“ (*tiefer tief = immer vollständiger*) になっている。この変更の合理的な理由を見つけるのは困難である。最もありそうな理由は、変更にしてゲーテは、*tiefer tief* という表現を取り除こうと望んで、前後の関連を考えずに書き改めたということである。つまりゲーテは、陳腐な Wagner との会話に比べれば、霊との交わりは何であれ、無上の喜びであると言うつもりだった。しかしゲーテは Faust が死ぬほど絶望して、崩折れたばかりだったということを忘れたのである。(Thomas).
520. Daß ... — (*Wie schade ist es,*) *daß. Fülle — als Übermaß empfundene Darbietung.* (Fischer). *Gesichte —* 古い複数形。= *Visionen, Erscheinungen.* vgl. V. 482. (Thend.).
521. trocken — *nüchtern, phantasielos, unbeschwingt.* (Arens). *weil ohne Schwung und Phantasie auf trockenenes Wissen bedacht.* (Trend.). *Schleier —* 悪役ではなく、視野の狭い精神の持ち主の意。„*Schema zur gesamten Dichtung*“ (etwa 1797—1800) には、„*Helles, kaltes wissenschaftliches Streben Wagner*“ とある。(Lange). 軽蔑的な裏の意味はない。Wagner は邪魔にならぬように、そっと歩いてくるので。(Trend.). 恐らく静かに、まめまめしく、心服して Faust の陰で暮している。(Arens). „*Urfaust*“ では Schwärmer (熱狂者) になっていて、意味が明確ではない。(Witkowski).
- 521+ Wagner — Christophorus Wagner は、1587年 Frankfurt/Main の Johann Spieß から出版された最古の民衆本、„*Historia D. Johann Fausten*“ 以来、*Famulus* と呼ばれていた。(Lange). Wagner が夜の部屋着を着て、ナイトキャップを被って、外部の世界の最初の代表者として登場するとき、彼の市民性は言うまでもなく、Faust の精神と霊の世界とは逆に、ある種の滑稽な効果を持つ。この効果は今日ではもうナイトキャップだけで、ごく普通に保証されているが、ゲーテの時代には、条件の良くない寝室や、全く暖房のない寝室では、どうしても必要な夜の服装であった。(Arens).  
Wagner (*tritt hinein*) *im Schlafrocke ...*
522. ここから始まる Wagner の場合は、16、17世紀の *humanistisch-rhetorisch* な



精神性を反映している。丁度これまでの Faust の場が、pansophisch な精神性を取り上げているように。だが後者は Faust 像を通じて、見事なまで具現されているけれども、前者については、Wagner によって頑迷なカリカチュアが浮び上がるだけである。Faust から本や財産を遺贈された Famulus Wagner は、のちに名声を得る。(Trunz). Wagner は Gottsched その他の合理主義者たちによって代表されるような、18世紀の平凡なアカデミックな理想を表わす。他方 Faust は、Herder によって宣言されたような、„Sturm und Drang" のラディカリズムを表現する。(Thomas).

Verzeiht! — Ihr に対する命令法. hör' — höre. „Urfaust" では hört (=hörte). 英訳では: „I heard your declamation". (Luke). deklamieren — Verse, meist Dramatisches, in künstlerischer bühhengemäßer Gestaltung vortragen; häufig wie „mit großer Lebhaftigkeit, erhöhtem pathetischen Ausdruck, Emphase, Rührung". (GWb). vgl. „Regeln für Schauspieler" § 20. (Gaier). Wagner は地霊の響き渡る韻文の台詞、或いは歌を聞いたのである。(Thomas).

523. griechisch — griechisch(es).

524. In diesem Kunst — Deklamation の技巧。朗読法。(Heinemann). was — etwas. 少し、多少。Wagner には人の心を捉え、感動させる思想の力が完全に閉ざされているので、朗読法が教職の唯一本質的なものに思われるのである。Wagner は 3 回このテーマを持ち出して、3 回とも Faust に拒否される。(Heinemann).

525. das — das gute Deklamieren. 巧みな朗読。(Thomas). viel wirken — 効果大きい。ここはゲーテの深遠な Scherz である。独裁者たちも俳優に教えを受けた。ナポレオン 1 世さえも。(Endres).

526. rühmen — mention boastfully. 自慢して言う。(Heffner). = sagen. (SWb). mit anerkennung, lob, prahlerei nennen, erzählen; mehr mit betonung des berichtens, erzählens. 複合語の berühren は、古くは „erwähnen" の意味で用いられていた。(Grimm). es ... rühmen = es rühmt. 自慢して言われる。es は非人称。次行が補足語。hören は過去分詞。この Vers は = Ich habe gehört, daß (es) öfters gerühmt wurde, Ein Komödiant könnte ...

527. Komödiant — ist im 18. Jh. noch = Schauspieler. (Arens). könnt' — könnte. 接続法 II. = könne. 間接話法。1773年啓蒙主義の神学者 Karl Friedr. Bahrdt (1741—92) は、1773年に新米の牧師は説教の仕方を、俳優

- から教えられるべきだ、と要求していた。ゲーテはその „Prolog zu den neuesten Offenbarungen Gottes, verdeutscht durch Dr. Carl Friedrich Bahrdt" (1774年) に於て、彼を激しく攻撃した。(Schöne). この2行の英訳は：  
I've often heard it said an actor might / Give lessons to a parson". (Luke).
528. Wenn der Pfarrer ein Komödiant ist ——— もし牧師にとって、ただ表面的な説教の効果だけが大事であるなら。(Trend.).
529. Wie ... denn ——— wie denn は前文を説明する追加文を導入する。Z. B. Alle seine Geschäftsfreunde ließen ihn in der Noth im Stich, wie denn zur Zeit einer allgemeinen Gefahr jeder nur an sich zu denken pflegt. (Heyse). das ——— 指示代名詞。V. 527を受ける。zu Zeiten ——— zuweilen. kommen ——— vorkommen. mag ——— かも知れない。  
俳優は誰か他の人の書いた台詞を、自分自身の考えであるかのように話すものである。Faust の返事は、もし牧師自身言うことが何もなく、他人の言葉をただ気取って話すだけなら、それは十分あり得ることだ、という意味である。(Heffner). この2行の英訳は： „Yes, if the priest an actor be, / As sometimes happens, certainly". (Bruford).
530. wenn ——— V. 532までかかる。man ——— ich. V. 533の man も同じ。So ——— こんな風に。Museum ——— バロックの学者や人文主義者たちの Neulatein の用語で、学者の Studierzimmer のこと。元来は Muse に捧げられた場所のことであるが、Wissenschaft は Muse の司る事柄なので、Wissenschaft の場所の意になった。(Trunz). Spinoza に „quasi in museo suo sepultus" (gleichsam in seinem Museum begraben) とある。これも Wagner の Schnitzel 風の引用の一つ。vgl. V. 555. (Schöne). gebannt ——— <bannen = festhalten, fesseln, als ausdrück anhaltender beschäftigung, teilnahme, gebundenheit. (Grimm).
531. Und sieht die Welt kaum einen Feiertag ——— Und die Welt kaum einen Feiertag sieht (=erlebt). die Welt ——— 世間 (の人々)。kaum ——— mit Mühe, schwerlich. (Fischer). やっと、辛うじて。einen Feiertag ——— 時の副詞。Tag (V. 529) との Reim のため、eines Feiertags (feiertags) の代りに4格を用いた。(Thomas).
532. Fernglas ——— Faust の時代にはまだ発明されていなかった。(Arens). 1609年オランダのモデルから Galilei によって、更に発展させられた Fernglas は、一方では学問的認識と大衆の好む偏見との距離を際立たせる。他方で

は Wagner によって語られた時代の学識の段階を、17世紀初頭という年代に決定づける。(Gaier). von weiten — von weitem が普通。leiten との Reim のため weiten とした。vgl. V. 3094, 8160. (Heffner). = aus der Ferne. (Fischer). この Vers は前行の sieht にかかる。

533. soll — 疑問。sie — V. 531の die Welt. Überredung — 適切で効果的な Reden や Schreiben の技術として、聴衆や読者の説得、納得を目標とする Rhetorik の中心概念。(Schöne). Wagner にとって大事なのは、内容ではなくて、説得の手段なのである。(Schröer).

534. Wenn ihr's ... — Wenn ihr es nicht fühlt, werdet es ihr nicht erjagen. 後半の結論部は、次行以下の Wensatz も受ける。ihr — allgemeine Anrede. (Düntzer). es — この二つの es は、Wagner が理解しようと努めている説得の方法を表わしている。真に説得力のある議論の唯一の根源は、話す人の感情であり、心であり、魂である。単なる表面的な技術は、効果がありそうには思われない。(Heffner). vgl. V. 9685f.: „Denn es muß von Herzen gehen, / Was auf Herzen wirken soll" (Trend.). erjagen — erlangen. (Grimm). durch eifrige Bemühung erreichen, erlangen. (Heyse).

Faust と Wagner との以下の対決には、Paralipomenon 1 の Planskizze が関っている: „Streit zwischen Form und Formlosen. Vorzug dem formlosen Gehalt vor der leeren Form. Gehalt bringt die Form mit. Form ist nie ohne Gehalt". 最後の文は Faust の立場に対する Antithese であるが、Wagner がそのように主張することはない。(Arens).

535. Wenn — 2行下までかかる。es は前行の es と同じ。nicht — 2行下の zwingt にもかかる。

536. urkräftigem Behagen — the spell of native vigor. 自然のままの迫力の魅力。(Thomas). urkräftig — mit Urkraft begabt, darin gegründet, und davon zeugend. (Heyse). Behagen — Behaglichkeit. (Gaier). zufriedenheit, freude, frohes gefühl, stille, innige kraft. (Grimm). 英訳では: „by their spontaneous power", „with primal power", „with a primal joy beyond control" など。

537. zwingen — überwältigen, überwinden, in seine gewalt bringen. (Grimm).

538. Sitzt — ihr に対する命令法。nur immer — ずっと、いつまでも。vgl. Nur immer bleiben Sie hier! Leimt zusammen — 命令法。zusammen - leimen. 膠で張りつける。糊と鉄で他人の著作から編集する。(Heffner).

539. Braut — 命令法。brauen — siedend bereiten. 煮て料理する。  
 (Fischer). metaphor, mit Bezug auf dem Publikumsgeschmack angepaßte  
 bilder- u stoffreiche od unschöpferisch-kompilierte Geistesprodukte. vgl. V.  
 172. (GWb). Ragout — Mischgericht. シチュー料理。(Fischer). vgl. V.  
 100. (Düntzer). von andrer Schmaus — aus dem Reichtum schöpferischen  
 Geistes の意。(Schröer). andrer — anderer. Pl. 2 格。他の人々の。  
 (Heffner).  
 パロックの Rhetorik は、当の事柄について最善のことを言うために、他  
 人の著作からできるだけすぐれた、思想や表現を引き継ぐことを推奨した。  
 この目的のために利用できる、アンソロジーが存在した。その逆が18世紀  
 に前面に出てくる、創造的な個性という思想であった。(Trunz).
- 540f. blast — 命令法。Aus ... 'raus — Aus ... heraus. の中から。この 2 行  
 の意は=Statt lebendiger, flammender Begeisterung ist euer Inneres ein Aschen-  
 häufchen, das wegen Mangels an Brennstoff nur kümmerliche Flammen gibt.  
 (Schröer).
542. Bewunderung von ... — (Ihr findet) Bewunderung von ... ここは = Ihr  
 findet allenfalls den Beifall der Unverständigen. (Schröer). Affen — 恐  
 らく V. 366 の Laffen. (Heffner). ここには二つの Anapäst が含まれている。  
 (Düntzer).
543. euch<sup>3</sup> der Gaumen — euer Gaumen = euer Geschmack. Gaumen —  
 obere, als Sitz des Geschmacks geltende Mundwölbung. (Fischer). darnach  
 — nach der Bewunderung. ここは = Wenn euer Geschmack zu der  
 Bewunderung neigt. od. Wenn ihr nach der Bewunderung strebt. この 2 行  
 の意は： „you can perhaps obtain the admiration of children and fools by the  
 methods suggested, if you taste tends to such things". (Heffner).
544. Herz zu Herzen — ein Herz<sup>1</sup> zu eurem Herzen. Man sagt an Herzen  
 sagen. (Düntzer) 聴衆の心を君の心に近附ける。即ち、聴衆の心を自分の  
 心に共鳴せしめる。(青木)。work heart to heart. 心から心へ働きかける。  
 (Heffner). この詩行の意味は恐らく = Doch werdet ihr nie eine Bewegung  
 von Herzen zu Herzen ermöglichen." 英訳では： „But you'll never get heart  
 to cleave to heart." (Greenberg). „But you will never make heart throb with  
 heart." (Bruford).
545. es — V. 534 の es. euch von Herzen — von eurem Herzen. この 2

行の韻律は：

Doch werdet ihr nie Herz zu Herzen schaffen,

Wenn es euch nicht von Herzen geht. (Ciupke).

546. Allein — aber od. nur. 恐らく nur. (Witkowski). しかし Arens は、nur der Vortrag は Faust に対して強すぎるとして、jedoch とする。„Urfaust" の „Allein der Vortrag nützt dem Redner viel" も、この意見を支持するとしている。Vortrag — Art und Weise der Darstellung, geschicktes od. kunstvolles Verfahren des Redenden od. Vortragenden. 話術。雄弁術。(Fischer). Glück machen — erfolg bewirken. (Grimm). des Redners Glück machen — 演説家を成功させる。

547. Ich fühl' es wohl, noch — Ich fühle es schon, aber noch. es — 前行を受ける。bin ... zurück — zurück|sein. 遅れている。未熟である。中世の大学の学芸学部 (Artisten—Fakultät) や学校の授業で、まだゲーテの時代まで教えられ、訓練されていた Redekunst は、古典古代の Rhetorik の伝統の中で、弁論の研究の最後の段階として、演説の技術も、従って声の調子や身振り手振りも取り上げていた。(Schöne).

Wagner は次のような Quintilianus (um 30 n. Chr. — um 96) の Rhetorik の定理のことを考えているのかも知れない： „pronunciatio non prima sed sola." (=Der Vortrag ist nicht das erste, sondern das einzige.) (Reclam).

548. Such! — 接続法 I. Er に対する命令法。Er — Ihr が余りに型通りで丁重すぎたり、Du が親しすぎたりする場合に、Er は „Faust" の中で二人称の代名詞として、しばしば用いられている。ゲーテの若い頃 Er は、Du よりも多少丁寧と見なされていて、両親と子供、教師と生徒の間や、噂話の中などでまだ自由に用いられていた。Faust は折にふれて Wagner に呼びかけるとき、三つの人称代名詞を全部用いている。この場合のように、話者が Ihr を用いていて、Er に代るのなら、それは一寸した冷淡さや、軽い立腹の表現である。もし Faust が Er を用いているのなら、Du への変更は、親しみ、gemütlich の表現になる。(Thomas).

„Faust" の中でゲーテは 1 度だけ、Sie (Ihnen) による現代の丁寧な形を用いている (V. 3524). (Heffner). redlichen Gewinn — 正直な利益。聴衆に対して正直に振舞え、ごまかしによって名誉 (des Redners Glück) を得ようと努めるな。(Thomas).

549. Sei!—接続法 I. Er に対する命令法。schellenlaut — eigentlich laut mit

- seinen schellen klingend, bildlich gesagt vom eitlen, prahlenden thoren. (Grimm). vgl. Die erste Epistel S. Pauli an die Corinthen, 13, 1: „Wenn ich mit Menschen- und mit Engelnzungen redete, und hätte der Liebe nicht, so wäre ich ein tönendes Erz, oder eine klingende Schelle.“ (Trunz). 宮廷道化師の服には鈴がついていた。鈴が鳴ると、道化がくるのが分かる。= Sei kein Narr, der mit Schellen klingelt, „kein schellenlauter Tor“ (Schröer).
- 550f. Es — 形式上の主語。Verstand und rechter Sinnが真の主語。動詞は sg. になっている。selber — おのずから。„Urfaust“では von selber. vor|tragen — gebührend od. mit den rechten Worten zum Ausdruck bringen. refl. としては sich selber od. von selber vortragen. (Fischer). 知性と正当な感覚は、技巧を用いずとも自然に表われる。英訳は: „Intelligence and proper sense/Need little art to be expressed.“ (Atkins). V. 550f. と552f. は、同じことを主張している。ここには言葉に対する不信、むしろある種の軽蔑が示されている。Faustは Rhetorikを、内容の一種の歪曲と見なしている。(Arens).
552. 's — es. was zu sagenを受ける。was — etwas. euch — 3格。君たちにとって。ここで Faustは一般的な呼びかけに戻る。恰かも人々のグループに呼びかけるかのように。(Heffner).
553. 's — es. 後半の zu 不定詞句を受ける。
554. eure Reden, die — 先行詞 (Pl.) と関係代名詞。so — sehr. ここは = eure Reden, die durch Wortzierat glänzen, aber inhaltsarm sind. (Königs).
555. denen — 関係代名詞。先行詞は前行の eure Reden. Menschheit — wesen eines menschen, humanitas. (Grimm). Schnitzel (紙切れ)は4格。der Menschheitを3格(= für die Menschheit)とするか、2格(Schnitzelの附加語)とするか、という問題がある。例えば3格の場合: Schnitzel kräuseln = gekräuselte Schnitzel herstellen. 行進の路上に撒かれる Papierblumenではなくて、子供の遊びが考えられる。ここでは aufgeputzte Nichtigkeitの比喩。(Petsch). Schnitzel kräuselnは元来紙切れで造花を作ること。この意味は = jemandem mit Hilfe der Rhetorik etwas vormachen. (Erler).
- 2格の場合: Schnitzel kräuselt — das Abgeschnittene zurechtstutzt. (紙片を切って形を整える)。ここでは eure Redenが、元来人間の本質(Menschheit)について、注目すべきことを発言している他人の著作から、言葉や思想を利用すること。(Trunz). Schnitzel kräuseln — bildl.

- bedeutungslose Gedankenspäne aufputzen. der Menschheit は 2 格で „aller Welt“ (月並みな) の代り。全体の意味は：Eure Reden, die so blinkend sind und in denen ihr doch nur Allerweltsgedanken aufstutzt, sind in Wirklichkeit höchst unerquicklich.“ (Fischer).
556. Sind —— 主語は eure Reden. Nebelwind —— どぎつく飾り立てた Rhetorik は、冷えびえして不快な、湿っぽい秋風に譬えられている。率直な感覚から生れた自然な雄弁は、春の太陽のように人を活気づけ、納得させるのであるが。(Thomas).
557. Der —— 関係代名詞。先行詞は Nebelwind. herbstlich —— adj. dem Herbste ähnlich od. gemäß, herbstmäßig. (Heyse). この 2 行の比喩は、これまでの会話の不毛と冷淡さを表わしている。(Witkowski).
- 558f. Ach Gott! —— ausdrück des schmerzes, der klage. (Grimm). die Kunst ist lang ... —— Wagner は至る処で Humanist たちや、古典古代の著作家たちを思わせる言葉を口にするが、ここでは Hippokrates を思わせる。後者の Aphorismus の冒頭には、ギリシャ語の „Das Leben ist kurz, die Kunst ist lang“ という文がある。これは 16 世紀以来 „Vita brevis, ars longa“ というラテン語訳で、しばしば引用された。(Trunz).
- 558—65. ゲーテがここで頭韻の形で、多くの Schnitzel kräuseln を Wagner に許していることを、認めてよいかも知れない：Kunst, kurz, kritisch, Kopf; Mittel, man, man, muß; lang, Leben; Bestreben, Busen, bang; erworben, erreicht; steigt, sterben. 脚韻の構成は、a b b a c d d c という技巧に富んだものになっている。(Heffner).
- 560f. es wird mir um etwas bang(e). 私は或る事が心配になる。kritischen Bestreben —— 古代文献の批判的研究。Wagner はここで 18 世紀の合理主義、啓蒙主義運動の時代を代表している。この時代は自らの業績 (V. 570—73) を大いに誇っていた。現代の規準から判断すると、当時の人々は、過去を取り扱う際の歴史的正確さについては、極めて無頓着だった。Herder と彼に続くゲーテは、この曖昧さに対しては能弁な批評家であり、その思い上がりを厳しく冷笑していた。(Heffner).
- Kopf und Busen —— それぞれ知性と感情の宿る場所。ここは Wagner が批判的研究を進めているときに、知的、感情的不安を感じていることを表わしているのであって、自分の頭や胸を心配しているのではない。(Heffner). 英訳では：„Often in the middle of my labor/My confidence and

- courage falter." (Greenberg).
562. nicht — 感嘆文では訳す必要はない。= doch. sind ... zu erwerben — 受動の können. Mittel — 先ず第一に古代の言語（ここではギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語）の知識、次いでこれらの言語で書かれた本や原稿。(Heffner).
563. die — 関係代名詞。先行詞は前行の die Mittel. Quellen — fontes. 最高の権威、究極の知識と見なされていた、古代の著作家たち。この意味は V. 566 の Faust の返事から明らかになる。(Witkowski). Faust の Quellen alles Lebens (V. 456, 1201) と、Wagner の Quellen とは正反対である。(Schmidt).
564. den halben Weg — 大学者への道の半ば（にも達しないうちに）。(Thomas).
565. wohl — wahrscheinlich. Teufel — in bezug auf Menschen ; im Tone des Bedauerns. (Fischer). armseliger mensch. (Grimm).
566. Pergament — aus Pergamus, wo es erfunden soll ; eine enthaarte, mit kalk gebeizte und mit bimsstein geglättete thierhaut zum schreiben und malen, sodann auch eine auf pergament geschriebene handschrift oder urkunde. (Grimm). vgl. V. 1108. (Schmidt). das Pergament のあとに Komma のない版もある。das — Pergament. Bronnen — Bronn と共に Brunnen の別形。(Fischer).
567. Woraus — Aus dem = Aus dem heiligen Bronnen.
568. Erquickung — erquicken = beleben. (Heyne). innerl. Stärkung, Erbauung, Tröstung ; auch bildhafte Vorstellung einschließend. (GWb). hast ... gewonnen — 現在完了で、Erquickung gewinnst du nicht の代り。
569. sie — Erquickung. dir — für dich.
- 566—69. ここでも歴史的事件に対する、心の暖かい共感者が、冷淡な原典研究者と対立している。(Trend.).
570. Verzeit! — Ihr に対する命令法。es — 次行と 2 行下の zu 不定詞句を受ける。groß — groß(es). Ergetzen — Ergötzen = Freude, Befriedigung. (GWb). Ergötzen は 2 行前の Erquickung について、Wagner が理解しているすべてである。Ergötzen は受容する、消極的な経験であり、その効果はすぐに終わる。Erquickung は生産的、活動的な経験であり、その効果は長続きする。(Heffner).



- 570—73. Wagner の控え目な反論は、益々高い段階を日指す人類の、絶えざる歴史的発展 (啓蒙主義哲学) を前提にしている。(Thend.).
- 570—85. ゲーテは Herder の見解を Faust に言わせている。そして Herder がこき下ろした、思い上がった啓蒙主義の哲学者たち (V. 578 で漠然と der Herren として言及) を、Wagner に代表させている。(Thomas).
571. Sich in den Geist ... — 時代時代の精神の中に自分を移す。時代時代の精神になる。
572. gedacht — gedacht (hat). 時代時代の精神を考えているうちに、Wagner は次行と共に Alexandriner の古風な韻律に陥る。(Schöne).
573. この行は前行の Zu schauen の補足語。wirs' — wir es. es は不定の目的語。es weit bringen = viel erreichen, Erfolg haben. (BWWb). make progress. (Heffner). zuletzt — das ergebnis geduldiger, dauernder bemühung. (Grimm). so ... sehr. weit gebracht (haben).
574. bis an die Sterne weit! — (Ihr werdet es) bis an die Sterne weit (gebracht haben)!
576. uns — 3格。我々にとって。ein Buch mit sieben Siegeln — 誰も読むことができないように封印してある書物。vgl. Die Offenbarung S. Johannis 5, 1: „Und ich sahe in der rechten Hand deß, der auf dem Stuhl saß, ein Buch, geschriben inwendig und auswendig, versiegelt mit sieben Siegeln.“ (Trend.). 7 という数は聖なる数、完全な数と見なされていて、さまざまな神秘的な関連や魔術的な力が、この数には与えられている。例えば7惑星とその7人の神々。創造の7日。7人の(大)天使。7頭のいけにえの動物。7人の賢者。7人の悪魔。7本のリラの弦など。(Grimm).
577. Was — 不定関係代名詞。
578. Das — 前行の Was. im Grund(e) — eigentlich, an und für sich, genaugenommen, auch : letzten Endes, alles in Allem. (GWb). der Herren — Pl. 2格。der Herren eigener — 先生方自身の(精神)。Thomas はこの Herren を Aufklärungsphilosophen とする。英訳では: „your own poor spirit“, „the spirit of you persons“, „the spirit of the gentry“ など。ゲーテは Faust (18世紀の議論の立場に対して異常なほど鋭い) に、立場に関連した解釈学の根本問題を、簡潔に表現させている。即ち、理解する者の主観による、理解されたものの制約である。(Gaier).
579. dem — 関係代名詞。先行詞は Geist.

580. Da — In diesem Fall. ist's — ist es. es — the gentlemen (der Herren) の著作を指す。過去の暗黒を見越した上で、今日の我々が如何に成長して、遥かに賢明によくなったかを示している、彼らのすぐれた歴史的描写のこと。(Thomas). denn — dann. この二つの区別は、18世紀にようやく定まった。「そのとき」という意味では、dann が決定的に優勢であるが、denn もまだときどき用いられた。しかし現代に於ては完全に消滅した。ゲーテは若い頃は両方とも混同して用いたが、晩年には区別した。(Grimm).

wahrlich — wahrhaftig, wirklich. (Fischer). Jammer — peinliche, der Verachtung verwandte Empfindung beim Erfahren von Nichtigem. (Fischer). 英訳では: „And then it often is a sorry sight" (Atkins), „And at that it often makes one weep" (MacNeice) など。

581. läuft euch ... davon — jm. davon|laufen. 人から逃げ出す。euch とあるので、V. 578の „der Herren eigner" は、「君たち自身の」と解した方が適当。Thomas は euch を倫理的 3 格とする。Blick — Anblick, Eindruck. (Gwb).

582. (Es sind) ein Kehrriechtfaß und ... Es は 2 行上の es. Kehrriechtfaß — ごみ溜め。übtr. Aufbewahrungsort für alles Wertlose. (Fischer).

583. Haupt- und Staatsaktion — 歴史的、政治的内容のドラマのことで、17世紀から18世紀への転換期頃に、ドイツの旅回りの一座によって上演された。これらのドラマは大げさな舞台装置や、大まかな芝居効果(殺人、死刑執行)によって、王家の歴史から血生臭い事件を上演した。ここでは歴史記述に対する諷刺的な表現。(Erler).

1700年頃の旅回りの一座では、例えば Karl 12世の死のような、国家の出来事を表現する芝居が好まれる。こうした芝居のあとに面白い Nachspiele が続く。この Nachspiele から Staatschauspiele が、Hauptaktionen として格上げされた結果、アルルカンを伴った一風変わった Haupt- und Staatsactionen が生ずる。最後の一見に値する Haupt- und Staatsaktionen は、1756年に Frankfurt a. M. で演ぜられる。すでに31年前に Gottsched (1700—66) が、こうした粗野な、大抵は俳優たちによって書かれたり、外国の手本に従って改作されたりした、旅回りの一座のドラマに対して、戦いを開始していた。

今日一般に用いられている言い回しの eine Staatsaktion aus etwas

- machen は、„über eine unbedeutende Sache mit umständlicher Wichtigkeit verhandeln" の意味である。(Trübner). Faust が生きていた時代には、Haupt- und Staatsaktion はまだ存在しなかった。(Arens).
584. trefflichen — ironisch gemeint. (Königs). pragmatisch — gemeinnützlich, anwendbar. (Endres). lehrhaft. (Düntzer). pragmatischen Maximen — 事件のより深い関連を、陳腐な因果関係から導き出して、道徳を説く歴史の教訓。(Witkowski).
585. Wie sie — 関係代名詞 die (Pl.) とほぼ同じ。sie は前行の Maximen. den Puppen im Munde — im Munde der Puppen. Puppen — 人形。人形芝居。(Fischer). 英訳では: „Well suited to the mouths of puppet-actors!" (Atkins), „Such as are suitable to marionettes!" (MacNeice).
586. Allein — Aber. des Menschen Herz und Geist! — Herz und Geist des Menschen!
587. jeglicher — jeder. Luther 訳聖書では、jeder より遥かに多く用いられている。今日では殆んど格調の高い (gehoben) 話し方でのみ用いられる。(Grimm). was — etwas. davon — von der Welt und des Menschen Herz und Geist.
588. was man so ... — (es handelt sich darum,) was man so ... (越塚). was は不定関係代名詞。so — so allgemein.
589. darf — 許可。das Kind beim rechten Namen nennen — ohne rücksichten die wahrheit grade heraus sagen. (Grimm). das Kind — the truth, as discovered by men of exceptional insight. (Thomas). ここは = Wer darf das Erkannte unumwunden aussprechen? (Arens).
590. Die wenigen, die — 先行詞 (4 格) と関係代名詞。was — etwas. davon — von der Welt, des Menschen Herz und Geist. (Arens). erkannt — erkannt (haben).
591. Die — 関係代名詞。次行末まで関係文章。先行詞は Die wenigen. gnug — genug. volles Herz — 真実で溢れる心。
592. Pöbel — niederer Volk. (Fischer).
593. Hat ... gekreuzigt und verbrannt — 現在完了。宗教的、学問的、或いは社会的領域に於て、当時の時代の慣習と関係を断ち、人類の進歩に新たな道を切り拓いて、民衆の誘惑者、異端者として処刑されたり、火あぶりの刑にされたりした人々。例えば Jesus, Jan Hus, Girolamo Savonarola,

Giordano Bruno など。(Erler).

594. es — 非人称主語。
595. Müssen's — müssen es. es — das Gespräch. Wagner に対する Faust の態度は、数十年後にゲーテによって、次のように適切に判断を下されている：„Es gibt wohl zu diesem oder jenem Geschäft von Natur unzulängliche Menschen; Übereilung und Dünkel jedoch sind gefährliche Dämonen, die den Fähigsten unzulänglich machen, alle Wirkung zum Stocken bringen, freie Fortschritte lähmen. Dies gilt von weltlichen Dingen, besonders auch von Wissenschaften." M. u. R. 422. (Arens).
596. Ich hätte ... fortgewacht — 接続法 II. 過去。外交的用法。ずっと起きていたかったのですが。nur immer — ずっと。nur は immer を強める。„Urfaust", „Fragment" では „Ich hätte gern bis morgen früh gewacht." になっていて、もっとしつこい感じ。(Thomas).
597. so — auf diese Weise. sich mit jm. besprechen — 人と話し合う。
598. als — since it is. ので。der erste Ostertag — 復活祭の最初の日曜日。(Heffner). als am ersten Ostertage — da (es) am ersten Ostertage (ist). 英訳では：„To-morrow however, as it is Easter Day." (MacNeice).
- 598—601. „Urfaust" や „Fragment" にはない。V. 903 以下の Osterspaziergang への橋渡しとして、1800年頃初めて挿入された。(Recham). 日付けの指示は、この場の終りの復活祭の鐘と、合唱の動機づけ、及び Vor dem Tor の一連の復活のテーマのために導入された。(Gaier).
599. Erlaubt — Ihr に対する命令法。eine und andere Frage — 一、二の質問。
600. befließen — Eleiß od. Sorgfalt anwenden, seit 16. Jhd. sich eines Dinges befließen — sich bemühen um. (Fischer). 現在完了。Alexandrin. (Trend.).
601. Zwar ... doch — it is true ..., but. 知識の蓄積によってのみ真理への道を発見できる、と信じている人間の素朴な願望。(Endres). Ab = Abtreten. 退場。
602. Wie nur — Wie denn. 何とまあ。dem Kopf... schwindet — 頭から消える。schwindet — entschwindet. alle Hoffnung — alle Hoffnung auf Erkenntnis. (Trend.). 猪突猛進する男のあせりを、適切に表現している、最初の独白の短かい Knittelvers は、かなり長い Jambus の詩行と交代する。

- これは以下の独白に遙かに落着いた高い調子を与える。Hebungは大抵5個である。多数の Alexandriner は、この場の厳肅な雰囲気を高めている。(Trend.).
603. Der —— 関係代名詞。次行末までかかる。先行詞は dem Kopf. schal —— gehaltlos, abgeschmackt, fade. (Grimm).
604. nach et. graben.
605. froh ist —— froh ist (er). er —— Wagner. Regenwürmer —— みみず。Schätzenとは反対の völlig Wertloses の意。(Fischer). Wagnerは勿論若い男であり、例えば Schüler が抱いているような (V. 1898—1901, 04)、理想主義的な観念にまだ取り憑かれている。彼のやり方は、恐らく Faust 自身が研究の初めに用いたやり方と違いはないだろう。Wagnerは Faust と同じように、一人浮世離れした生活をしているのである。Faustは Wagner を原則的に軽蔑しているのではないということは、Wagnerを自分の助手に選んだということから推論される。Wagnerは後にセンセーショナルな成功を収めた、定評のある学者として、発展しつつある自然科学に取り組んでいる。有名な Paralipomema 1 の „helles, kaltes wissenschaftliches Streben" という、ゲーテ自身による Wagner の性格描写は、決して軽蔑ではない。(Arens).
- 606—33. ここはすべて地霊の場と矛盾している。そこでは地霊は、地上の領域でのみ創造し、永遠に活動する霊として表現されており、それに応じて Faust に対する地霊の影響も、エネルギーを高め、Faust を生の中へ狩り立てるはずのものであった。それに対してここでは、地霊を呼び出した Faust の意図として、神的、創造的存在への関与、「頼りない人間の運命」の超越が述べられている。これらすべては、本来の地霊の場と、Faust に対するその直接的な影響には全く関係のないものであって、天上の序曲が表現している、新しい見解の下で付け加えられたものなのである。(Witkowski).
607. Wo —— 関係副詞。前行の hier. Geisterfülle —— Himmelskräfte と Erdgeist の出現への言及。vgl. V. 520. (Thomas).
608. ここと V. 610f. は、V. 519と一致しない。(Arens).
609. Dem ärmlichsten (Erdensohn) = 前行の dir. Erdensohn —— erdenkind, menschensohn. 地上の子。人の子。(Grimm).
610. rissst ... los —— los|reißen. Verzweiflung —— この絶望は V. 519では

- schönstes Glück と呼ばれている。(Heinemann).
611. Die — 関係代名詞。先行詞は Verzweigung. mir die Sinne — meine Sinne. 4 格。
- 612f. die Erscheinung — für numinose Phänomene, Epiphanien : Offenbarung einer Gottheit, eines überirdischen Wesens. (GWb). so ... daß=so ... that. recht — ganz, sehr. (Fischer). sollte — mußte. (Thomas).
- 614f. das — 関係代名詞。V. 617までかかる。先行詞は Ebenbild. Ganz nah gedünkt dem Spiegel ew'ger Wahrheit — Ganz nah dem Spiegel ewiger Wahrheit gedünkt (hatte). sich dünken — wännen, sich (fälschl) einbilden, mehrf als Ausdruck von (Selbst-)Überheblichkeit u Eigendünkel. (GWb). Spiegel — 神は見守る人間に、天上の輝やきを反射する、まばゆい鏡であるという考え。reine (truglose) Anschauung des Ewigen. (Fischer). この 2 行の韻律は：  
 Ich, Ebenbild der Gottheit, das sich schon  
 Ganz nah gedünkt dem Spiegel ew'ger Wahrheit. (Ciupke).
- 614ff. 創造への衝動と、創造する力として証明される、完全な、本当の神との類似性を求める Faust の努力が、ここで初めて強調されている。それは新しい Faust-Dichtung の Hauptmotiv である。(Petsch). この節は極めて重要である。なぜならここで、言わばポイントが切り換えられているからである。(Arens).
616. Sein selbst genoß — Sein(es) selbst genoß. Sein(er) selbst は主語 das の再帰代名詞 2 格。= sich genoß. (Heffner). genießen — Freude od. Gewinn von etwas haben. 古くは大抵 2 格と結びつく。ゲーテの genießen の用例の半分は、2 格の補足語をとっている。(Fischer). in Himmelsglanz und Klarheit — Düntzer と Loeper は -Klarheit, 即ち、Himmelsklarheit とする。ここは = sich wohl gefiel in überirdischen Glanz. (Schröer).  
 genießen は或る事柄との直接的な接触を意味するので、kennen や wissen より以上のものである。従ってゲーテは折にふれて、神と結びついた幸福な感情を意味する „religiöser Genuß" について語っている。この genießen は Faust の最期の言葉の中で繰り返されている。V. 11586. (Buchwald).
617. Und abgestreift den Erdensohn — Und den Erdensohn abgestreift (hatte). 現世の属性 (den Erdensohn) をすべて脱却した。(Heffner).
618. Ich, mehr als Cherub — Ich, (der ich) mehr als Cherub (bin). mehr als

- Cherub Cherubim (Pl.) は何もせずに、神を眺めることで満足している高位の天使。これに対して Faust の „Gottähnlichkeit" は、認識の最高の段階にあって、絶えず創造的に活動することを意味する。(Erler). 天使のヒエラルヒーに関する中世の考えでは、Cherubim は神を究めることのできない主天使たちよりも、まだ神の近くにいる。Cherubim という名前は、Philon (13 v. Chr.—45/50) の解釈に従えば、„Fülle der Erkenntnis" として説明されている。(Schöne). dessen — 関係代名詞 2 格。先行詞は Ich。従って = meine freie Kraft.
619. 自然を生理的な有機体として見る、擬人的メタファー。(Heffner).
620. schaffend — Faust の最高の目的は Schaffen (創造する) である。Schaffen に於て Faust の個性は頂点に達する。(Heinemann). Götterleben — ein Leben, wie es die Götter führen. (Fischer).
621. Sich ... vermaß — 厚かましくも夢見ていた。(Thomas). sich vermessen, ct. zu tun. zu fließen と zu genießen が補足語。ahnungsvoll — ゲーテの好んだ言葉。古い版では ahndungsvoll. 1817年の版から ahnungsvoll. (Grimm). 普通は悪い予想の意味だが、ここでは良い予想に満ちての意味。(Thomas). hoffnungsvoll. (越塚). ich's — ich es. es は前半の内容を受けける。この 4 行の韻律は：  
 Ich, mehr als Cherub, dessen freie Kraft  
 Schon durch die Adern der Natur zu fließen  
 Und, schaffend, Götterleben zu genießen!  
 Sich ahnungsvoll vermaß, wie muß ichs büßen! (Ciupko).
622. Donnerwort — vgl. V. 512f. 次行以下の du は Erdgeist を指す。(Heffner). mich hinweggerafft — swept me away, viz., from the place of my high dreams. (Thomas). 現在完了。
623. Nicht darf ich dir zu gleichen mich vermessen — Nicht darf ich mich vermessen, dir zu gleichen. vgl. V. 621.
624. Hab' ich die Kraft dich anzuziehen besessen — Wenn ich die Kraft besessen habe, dich anzuziehen. besessen のあとの Komma の代わりに、Semikolon や Doppelpunkt のついた版がある。
625. So hatt' ich dich zu halten keine Kraft — So hatte ich (doch) keine Kraft, dich zu halten.
626. jenem — Faust としては不自然なこの言葉は、„Faust" 執筆の再開に

- 当って、中断していた „Faust" がゲーテにとって、如何に遠い存在になっていたかを語っている。(Alt).
627. Ich fühlte — Fühlte ich. so klein, so groß — 地霊を呼び寄せることができた、ということでは groß. 地霊そのものには堪えられなかった、ということでは klein. Faust の考えは、この天国と奈落の瞬間を中心に回転する。(Arens).
628. stießest ... zurücke — zurück|stoßen. ゲーテはしばしば短縮していない、zurücke の形を用いている。V. 141, 3689 (Fischer).
629. Ins ungewisse Menschenlos — アダムの世界からの追放が、ここに反映されている。(Gaier).
631. jenem Drang — V. 455—59 に表現されているように、あらゆる生命の根源の探究へと狩り立てる衝動。(Heffner.) 魔法によって超自然的なことを探究しようとする衝動 (V. 377). この衝動は、地霊に拒絶されたにも拘らず、Faust が後に悪魔を呼び出す理由になっている。(Königs).
632. unsre Taten ... unsre Leiden — 成功した地霊の呼び出しは Tat であり、地霊から受けた拒絶は Leiden である。Faust は絶望の中で、自分の体験したことを一般化して行く。(Königs). Faust が V. 639まで Wir-Form で語っている認識は、彼の最初の独白にすでに含まれている。(Arens). so gut als = so gut wie. Alexandriner. (Trend).
633. Sie — 前行の unsre Taten と unsre Leiden. unsres Lebens Gang — den Gang unsres Lebens. Leben は Taten と Leiden から成り立っている、Taten と Leiden は Leben を阻むことができる、という意味。(Arens).
634. Dem Herrlichsten, was auch der Geist empfangen — Dem Herrlichsten auch, was der Geist empfangen (hat). was — 関係代名詞。先行詞は Dem Herrlichsten. 形容詞最上級の名詞的用法。= dem vornehmsten Begriff des Geistes (des Denkvermögens). 例えば: „Begeisterung, Inspiration, intuitive Einsichten, ein universales Lebensgefühl, hohe Idealität überhaupt." (Arens). empfangen — in sich aufnehmen. (Fischer).
- 634—39. この節は Tat について、V. 640—51は Leiden について語っている。(Düntzer).
635. Drängt ... sich an — sich an|drängen = sich jm. aufdrängen, sich an et. herandrängen. 押し寄せる。つきまとう。(GWb). immer fremd und fremder — これについてはさまざまな説明がなされているが、ここでは Fischer



- の見解に従いたい。要するに E. Schmidt の説明 (Adverbia, wohl : fremder und noch fremder) が一番自然のように思われるというのが、Fischer の見解である。fremd — auf störende Weise. (Fischer). 従って = immer störender und noch störender, d. i. in immer störenderer und noch störenderer Art. (Fischer). この詩行は = Drängt sich Stoff in immer störenderer und noch störenderer Art an. Stoff — irdische Materie, Hefe, Schwere. (Schmidt). 精神が受け入れる最も高貴なものにも、やがてこの世の物質的なものが、後から後から追ってきて、次々に妨害するという。この 2 行は結末の V. 11958—65 と共に、„Faust“ ドラマの意味の構成上、重要な役割を演じている。(Schöne). この 2 行の英訳は : „More and more that is extraneous / Obtrudes upon what's noblest in our minds.“ (Atkins).
636. das Gute dieser Welt — das irdische Behagen od. Wohlsein. (Fischer). das Gute は das Bessere の敵である。我々は俗世の快樂の中で簡単に満足して、あらゆる理想主義を妄想として拒否する。(Schröer).
637. heißt — 言われる。das Beßre — das Bessere = das Herrliche. 我々の精神が受け入れた高貴なもの。理想。Trug — Betrug, Blendwerk, Täuschung. (Fischer). Wahn — grundlose Einbildung. (Fischer). この 2 行の英訳は : „When we attain this world's material goods, / All better things are called a madman's fancies.“ (Atkins).
638. Die uns das Leben gaben, herrliche Gefühle — Herrliche Gefühle, die uns das Leben gaben. Die は関係代名詞。先行詞 herrliche Gefühle があとにきた形。Leben — Leben と呼ぶに値する真の Leben の意。高められた感情からのみ生じる。(Heffner). herrliche Gefühle — die Ideale. 理想は我々に生命を与え、大いなる活力を与える。(Düntzer). 中間休止のない Alexandriner. (Schröer).
639. Erstarren — Erkalten. (Fischer). ほとんど sterben と同義。(P. Stöcklein)<sup>1</sup>. Gewühle — das verworrene Getriebe in der Welt, mehrf. „irdisches/menschliches G.“ (GWB). <sup>1</sup>P. Stöcklein については、V. 644 の注参照。
640. Sonst — ehem, das heißt in der Jugendzeit. (Buchwald). vgl. V. 771. (Stöcklein). 2 行下の nun に対応。(Düntzer). 以下はシラーの optimistisch な詩 „Das Ideal und das Leben“ と正反対の、pessimistisch な理想と生活の表現。(Königs).
641. hoffnungsvoll — この対極が V. 644 の Sorge. (Düntzer). zum Ewigen

- „zu Gott" oder „zum Bereich des ewig Währenden." 自我を世界に拡大しようとする Faust の努力の意味では、後者が適当か。(Arens).  
erweitert — erweitert (hat). (Arens).
642. So — 2行上の Wenn を受ける。ihr — Phantasie. nun — jetzt.  
次行の Wensatz を受ける。
643. Glück auf Glück — 幸福が次々に。(Heffner).
644. Die Sorge — この憂いのモチーフは、ここでは空想の飛翔に対する反対のモチーフであるが、第二部の重要な場面でより詳細に登場する。  
V. 11384—498. vgl. Paul Stöcklein, Fausts zweiter Monolog und der Gedanke der Sorge. In : Aufsätze zu Goethes „Faust I." Hrsg. v. W. Keller. 1974. (Trunz). gleich — sogleich. (Thomas).
645. Dort — im tiefen Herzen. wirken — bewirken. sie — die Sorge.  
以下の sie もすべて同じ。
646. sich wiegen — 体を揺すぶる。動く。störet — stört. Alexandriner.  
(Trend).
647. deckt sich ... zu — sich zu|decken. 身を包む。vgl. V. 11426. In  
verwandelter Gestalt. (Trend).
648. mag — かも知れない。vgl. V. 1597ff. (Petsch). Alexandriner. (Trend).
650. Du — Faust. allem, was — 先行詩と関係代名詞。allem — allen  
Schlägen. was nicht trifft — was (dich) nicht trifft. (Schröer).
651. Was — 不定関係代名詞。4格。das — was を受ける指示代名詞。  
4格。beweinen — von dem Schmerzen, es verloren zu haben. (Düntzer).  
(決して失うことのないものを、) 失ったと思って悲しんで嘆く。Alex-  
andriner. (Trend). 英訳ではこの2行は : „We live in dread of things that  
do not happen/And keep bemoaning losses that never will occur." (Atkins).  
憂いに対する Faust の認識について、50歳のゲーテがここで、すでに自  
分の頭を占領している考えを以て、話を進めていると言うこともできるし、  
Faust は一体どのようにして、憂いを認識するようになったのか、と問う  
こともできる。なぜなら Faust 自身憂いを知っていた、ということは全く  
あり得ないからである。彼は家屋敷は勿論、妻子も、如何なる財も持って  
はいない。地獄も悪魔も恐れない彼は、火や水、短剣や毒に対しても、何  
らこわがることもない — 憂いは最後に彼が金持になったときに、よう  
やく訪れる。(Arens).

652. Den Göttern — Pl. (Fischer). zu tief — allzu tief, daher kein Zweifel mehr. es — 前半の Den Götten gleich' ich nicht. Alexandriner. (Trend).
653. der — 関係代名詞。先行詞は Dem Wurm. vgl. Der Psalter 22, 7: „Ich aber bin ein Wurm und kein Mensch, ein Spott der Leute, und Verachtung des Volks.“ (Gaier). この3行は見捨てられた人間存在の軽さの極端な表現。vgl. V. 498, 707. 塵を食べる Wurm は、同様に塵を食べる Schlange を思わせる。vgl. V. 334f. Faust は今や人間存在の自己評価の最低点に到達した。(Arens).
654. Den — 関係代名詞。先行詞は Dem Wurm. wie — zeitlich. (Düntzer). während, wenn.
655. Des Wandrers Tritt — der Tritt des Wandrers.
- 656f. es — was. was — 不定関係代名詞で、書籍、紙類、実験器具などの意。Staub — 完全に抽象化されて、現世の下らないもの、無価値なもの、無常の意。霊魂、彼岸、不滅といった価値との対立が、常に予定されている。(Grimm). diese hohe Wand — 4格。幾重もの棚でできている「高い丸天井の部屋」の高い壁。(Trend). Aus — bestehend aus. (Thomas). verengt — verengt. vgl. beschränkt in V. 402. (Thomas).
- 656—85. 部屋と所有物を吟味しながら、Faust が見出すのは、塵とがらくたばかりである。自分自身も先祖、つまり過去に捉われた者と見なす。あらゆる知識の再度の拒否。(Arens).
- 658f. Der Trödel, der — 先行詞と関係代名詞。Trödel — wertloses Zeug. (Fischer). Tand — Trödel, wertloses Zeug. (Fischer). Mottenwelt — Welt für Motten. 紙魚の住むのに適した世界。(Fischer). vgl. Evangelium S. Matthäi, 6, 19: „Ihr sollt euch nicht Schätze sammeln auf Erden, da sie die Motten und der Rost fressen.“ (Gaier). dränget — beenget. (Schröer).  
ここは= (Ist) der Trödel (nicht Staub), der ... dränget?
660. soll ich — nein, unmöglich を期待する修辭的な疑問。次行の Soll ich vielleicht も同じ。was — 不定関係代名詞。
- 662f. Daß — 次行の Daß と同じく lesen の補足語。sich gequält (hatten). hie und da — ab und zu. gewesen (war). 1806年ゲーテは、歴史学者 Jena 大学教授 Heinlich Luden (1780—1847) との討論の中で、最も厳密な歴史研究は、次のような一個の真実を明らかにするだけであろうと語った: „daß es zu aller Zeit und in allen Ländern miserable gewesen ist. Die

- Menschen haben sich stets geängstigt und geplagt ... Nur wenigen ist es bequem und erfreulich geworden." (Endres). Mephisto は V. 280ff で、人間の悲惨さを語っている。(Reclam).
664. Was grinsest du ... her — Was grinsest du mich, hohler Schädel, an? (Königs). Was — why. (Atkins). her|grinsen. vgl. V. 417, 6768f. (Petsch). 家の中の頭蓋骨は、Schwarzenkünstler を暗示する。(Loeper).
665. Als daß ... — Um nicht anders als zu zeigen, daß. meines — mein Hirn. einst — einmal. (Arens).
666. leicht — 飛翔を楽にする、浮力のあるという意味の „light". 次の schwer と対照をなす。(Thomas). froh machend. (Fischer). Tag — 精神に翼を付け、楽に飛翔させる。Dämmerung — 精神を消沈させ、重々しくする。(Trend.). gesucht — gesucht (hatte). in der Dämmerung schwer — in schwerer Dämmerung, im düsteren Hin und Her zwischen Trug und Wahrheit. (Reclam). Dämmerung — Unklarheit des Geistes. (Schröer). Alexandriner. (Trend.).
667. geirret — geirrt (war)
- 664—67. leichter Tag, schwere Dämmerung, Wahrheit, irren は互いに矛盾する。Faust はここで、一切の真理を渴望する余りに、den „leichten Tag", 即ち、生への喜びを失ってしまった、彼自身の混乱について語っている。(Arens). この 4 行の英訳は : „You empty skull, why bare your teeth at me / Unless to say that once, like mine, your addled brain / Sought buoyant light but, in its eagerness for truth, / Went wretchedly astray beneath the weight of darkness." (Atkins).
668. Ihr Instrumente — お前たち実験道具。次行の Rad, Kämme 等の描写は、一般に控え目である。従って特定の実験道具が考えられているのではない。ゲーテは16世紀から18世紀までの学者が、さまざまな、時には扱い難い道具を利用していたことを知っていた。vgl. vor V. 6819 : „weitläufige unbehelfliche Apparate." (Trunz). freilich — certainly, surely. (Thomas). spottet mein — spottet meiner.
669. Mit ... — ... のついた Instrumente. Rad — 車輪. Kamm — Kammrad. 歯車。(Grimm). Walze — rolle. ein wesentliche theil einer maschine. (Grimm). Bügel — steigbügelartig gebogene Handhabe. 鐙の形をした把手。(Fischer). bogen. (Grimm). 英訳ではこの四つの道具は :

- „wheel, cogs, cylinder, bridle.“ (Heffner).
670. Tor — 自然の神秘への入口。(Thomas). ihr — Instrumente. solltet  
— はずであった。
671. Zwar... doch — vgl. V. 601. Bart — 鍵の先。(Grimm). kraus —  
gekrümmt, wellig gebogen. (Fischer). Zacken habend. (Heyse). Riegel —  
Riegel des Schlosses. (Reclam). 自然の神秘の門の鍵。Alexandriner.  
(Trend.).
- 672f. Geheimnisvoll ... nicht berauben — Geheimnisvolle Natur läßt sich am  
lichten Tag des Schleiern nicht berauben. jn. eines Dinges berauben. この  
2行は= Die Wunder der Natur hüllen sich auch am hellen Tage in einem  
geheimnisvollen Schleier. (Trend.).
674. was — 不定関係代名詞。sie — Natur. 主語。deinem — 次行の  
du と同じく Faust 自身。mag ... 好む。Alexandriner. (Trend.).
675. Das — 指示代名詞。4格。前行の was を受ける。ihr — Natur. jm.  
et. ab|zwingen. Hebel, Schrauben — 物理的実験の際に利用する。  
(Reclam). Alexandriner. (Trend.). 感覚器官の自然の力によるのでなければ、  
技術的な手段によっては、自然の認識に到達することはできない、と  
いうのがゲーテの確信であった。(Heinemann.).
676. alt(es) Geräte, das — 先行詞と関係代名詞。Geräte は Gerät の古形。  
(Fischer). gebraucht (habe).
677. mein Vater — Faust の父親は、V. 998ff., 1034ff. で語られているだ  
けである。(Petsch).
678. Rolle — die Zugrolle der Lampe. (Düntzer). Schriftstück in Rollenform,  
vorwiegend für Urkunden. (Trunz). この Rolle が何であるか、明らかでは  
ない。(Arens). 英訳では roll, scroll. angeraucht — von Rauch geschwärzt.  
煙で煤けた。vgl. V. 405. (Fischer).
679. schmaucht(e) — brauchte (V. 677) との Reim のため。schmauchen —  
— qualmen. (Schröer). Alexandriner. (Trend.).
680. Weit — 比較級を強める副詞。hätte ... verpraßt — 接続法 II。過去  
の非現実。verpraßen — prassend durchbringen. 贅沢して(財産を)浪  
費する。(Grimm). mein weniges — mein geringes. 私の下らぬ物。  
Alexandriner. (Trend.).
681. mit dem wenigen belastet — その下らぬ物を背負い込んで。この2行

- の英訳は：„Far better to have squandered the little I have/Than to sweat here beneath that little's burden!" (Atkins):
682. Was — 不定関係代名詞。ererbte — 過去分詞の副詞。as an inheritance. (Thomas). Väter — Ahnen. (Fischer). hast — 助動詞ではない。(Thomas).
683. Erwerb — 命令法。<erwerben = durch geistige Anstrengen zu seinem wirklichen Eigentum machen. (Fischer). es — 両方とも前行の Was を受ける。4 格。um ... zu 不定詞。haben と besitzen については、vgl. „Des Künstlers Erdewallen" (1773) : „... Wo mein Pinsel dich (meine Göttin) berührt, bist du mein... Du gehst in eines Reichen Haus... Und er besitzt dich nicht, er hat dich nur." 自らの活動によって獲得されたものだけが、真の所有であるということ。vgl. V. 11575ff. (Witkowski). in haben ist mehr das bare innehaben, die detention, in besitzen der erwerb, der rechtsgrund enthalten. (Grimm).
- この警句風の 2 行は、恐らく後から挿入されたものであろう。詩節の構成は、この 2 行の無い方が、より規則正しく自然である。(Heinemann).
684. Was — 不定関係代名詞。4 格。次行の was も同じ。nicht, (das) ist ... nützen — ausnützen, zu seinem Vorteil verwenden. (Fischer).
685. erschafft — mit schöpferischer Kraft zu seinem Eigentum machen. (Fischer). 2 行上の „Erwerb" を強めたもの。(Schmidt). das — was を受ける指示代名詞。4 格。er — der Augenblick. 瞬間が何かを創り出す限りに於てのみ、瞬間は Faust に役立つのである。Faust がその中で生きている学問は、das Toteしか捉えられない。生き生きした現実は予感としても、認識によっては到達できない。従って学問が彼の中に惹き起こすことのできるのは、絶望だけである。(Schröer). Alexandriner. 中間休止が第 3 Hebung のあと以外にくる例。(Heffner).
686. warum heftet sich mein Blick auf jene Stelle? — warum haftet mein Blick auf jener Stelle? Alexandriner. (Trend.). 次行も同じ。ここから V. 736 までに於て、V. 630f. に続く一般的な人間の運命と、特殊な Faust 自身の存在条件の考察は、純粹に否定的な総決算に到達することになる。(Arens).
687. dort — jenes Fläschchen の附加語。
688. Warum wird mir... — Warum wird (es) mir (vor Augen)... helle. auf

einmal — 突然。lieblich — angenehm. (Heyse).

689. Als wenn — Wie wenn. Mondenglanz — Mondglanz, Mondesglanz  
が普通。Mond は18世紀には、しばしば弱変化した。(Fischer). vgl. V.  
386. umwehen — untrennbar, wehend sich um etwas herum bewegen,  
umgeben. (Grimm). Alexandriner. (Trend.). 月の光が薄暗い森の中を照ら  
して、旅人に正しい道を教えるように、毒の入った瓶は、絶望からの出口  
である死を、Faust に示す。(Königs).